

田能遺跡群発掘調査概要・II

— 農地還元利活用事業「樫田地区」に伴う発掘調査 —

2001.3

大阪府教育委員会

は し が き

田能遺跡群の存在する高槻市大字田能地区は、北摂山地の東北部の山々に囲まれた山間小盆地に位置し、大阪府では極めて希少な山と緑に囲まれた地域であります。

今回の調査は、農地還元利活用事業（樫田地区）に先立って、平成11年度から平成12年度にわたって実施したものであります。それまで田能地区については、文献に鎌倉初期には荘園が開かれていたことが記述され、その研究がなされていること、北西の山腹に戦国時代の武将である明智光秀が築城したと伝えられる山城の田能城跡など、歴史的には著名な地域でした。しかし、埋蔵文化財については、高槻市教育委員会によって遺跡分布調査が行われ、田能南遺跡、田能北遺跡などの遺跡が発見された以外は、実態が不明の地域でありました。

しかし、今回の調査において、神宮寺西遺跡では鎌倉時代の建物跡、溝、田能城跡では鎌倉時代の屋敷に伴う柱穴、土坑、田能北遺跡では室町時代の建物跡などの遺構を数多く確認することができました。

これらの遺構は、鎌倉時代を中心とするものがほとんどで、文献などによりこの地域が鎌倉時代初期に開発されたと記述されており、このことが遺構・遺物の上からも明らかになりました。また、平安時代の遺物も少量ながらこれらの遺跡から出土し、その時代には生活が営まれていた可能性が高いことなど、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査にあたっては、ご協力いただきました高槻市教育委員会、樫田地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝の意を表すとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、農地還元利活用事業（榎田地区）に先立って実施した、高槻市大字田能所在、田能遺跡群発掘調査概要・IIである。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第二係（平成11年度）・調査第1グループ（平成12年度）技師奥和之が担当した。発掘調査は、神宮寺西遺跡及び田能城跡を平成11年度、田能北遺跡を平成12年度に実施した。それに伴う整理作業は、各年度毎に資料係（平成11年度）・調査管理グループ（平成12年度）が平行して行い、平成13年3月に全ての作業を終了した。
3. 調査の実施に当たっては、高槻市教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所・榎田地区土地改良区をはじめとする諸機関および下記の方々に御指導、御教示を賜った。（順不同、敬称略）
富成哲也、森田克行、橋本久和（高槻市教育委員会）、重金誠（能勢町教育委員会）
4. 本調査の写真測量は、神宮寺西遺跡を南紀航空株式会社、田能城跡を拓殖建設計画株式会社、田能北遺跡を三和航測量株式会社に委託した。なお、撮影フィルムについては各社で保管している。
5. 本書の執筆・編集は、奥が担当した。

凡 例

1. 座標、方位については国土座標、標高については東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
2. 遺構の色調については、小山正忠・竹原秀雄 「新版標準土色帳」 日本色彩研究所1992を使用した。
3. 遺物は、挿図、図版の番号と一致させた。

目 次

はしがき

例言

目次

第1章 はじめに	1
第2章 位置と環境	3
第3章 神宮寺西遺跡の調査	4
第4章 田能城跡の調査	9
第5章 田能北遺跡の調査	18
第6章 まとめ	23
報告書抄録	24

挿 図 目 次

第1図 大阪府と調査地点	1	第18図 田能城跡 土坑1 遺物出土状況図	12
第2図 周辺の遺跡図	2	第19図 田能城跡 土坑1 出土遺物	13
第3図 神宮寺西遺跡 平面図	4	第20図 田能城跡 土坑3 平面・断面図	14
第4図 神宮寺西遺跡 基本層序断面	4	第21図 田能城跡 土坑3 出土遺物	14
第5図 神宮寺西遺跡 建物1 平面・断面図	5	第22図 田能城跡 建物1 平面・断面図	15
第6図 神宮寺西遺跡 建物出土遺物	6	第23図 田能城跡 土坑4 平面・断面図	15
第7図 神宮寺西遺跡 建物2 平面・断面図	6	第24図 田能城跡 土坑5 平面・断面図	16
第8図 神宮寺西遺跡 遺構内出土遺物	7	第25図 田能城跡 土坑5 出土遺物	16
第9図 神宮寺西遺跡 溝1 出土遺物	7	第26図 田能城跡 遺物包含層出土遺物	17
第10図 神宮寺西遺跡 溝1 断面図	7	第27図 田能北遺跡 平面図	18
第11図 神宮寺西遺跡 遺物包含層出土遺物	8	第28図 田能北遺跡 基本層序図	18
第12図 田能城跡 平面図	9	第29図 田能北遺跡 建物1 平面・断面図	19
第13図 田能城跡 基本層序断面図	9	第30図 田能北遺跡 石垣1 平面・断面図	20
第14図 田能城跡 屋敷地1 平面・断面図	10	第31図 田能北遺跡 石垣2 平面・側面図	21
第15図 田能城跡 石垣平面・側面図	11	第32図 田能北遺跡 道状遺構断面図	21
第16図 田能城跡 遺構内出土遺物	11	第33図 田能北遺跡 遺物包含層出土遺物	22
第17図 田能城跡 土坑1・2 平面・断面図	12		

図版目次

図版表紙 調査地区全景(南西より)

図版1 神宮寺西遺跡

1. 全景(南東より)
2. 基本層序(南より)
3. 建物1・2(西より)

図版2 神宮寺西遺跡

1. 建物1(西より)
2. 建物1 SP3断面(西より)
3. 建物1 SP8断面(東より)
4. 建物1 SP9断面(東より)
5. 建物2(南より)
6. 建物2 SP26断面(西より)
7. 建物2 SP27断面(西より)
8. 建物2 SP28断面(東より)

図版3 神宮寺西遺跡

1. SP60遺物出土状況(南より)
2. 溝1(南から)
3. 溝1断面(北より)

図版4 田能城跡

1. 全景(南より)
2. 基本断面(北より)
3. 建物1(南より)
4. 建物1 SP149断面(北より)
5. 建物1 SP143断面(北より)
6. 建物1 SP139断面(東より)

図版5 田能城跡

1. 石垣1(南より)
2. 石垣1側面(東より)
3. 土坑1・2(南より)

図版6 田能城跡

1. 土坑2遺物出土状況(東より)
2. 土坑2遺物出土状況細部(東より)
3. 土坑2断面(東より)跡

図版7 田能城

1. 土坑3(南より)
2. 土坑3断面(南より)
3. 屋敷地1断面(南より)
4. 土坑5(西より)
5. 土坑5上層断面(南より)
6. 土坑5断面(東より)

図版8 田能北遺跡

1. 全景(北より)
2. 基本断面(南より)
3. 建物1(北より)

図版9 田能北遺跡

1. 石垣1(西より)
2. 石垣1細部(西より)
3. 石垣2(西より)

図版10 出土遺物

神宮寺西遺跡・田能城跡

図版11 出土遺物

田能城跡

図版12 出土遺物

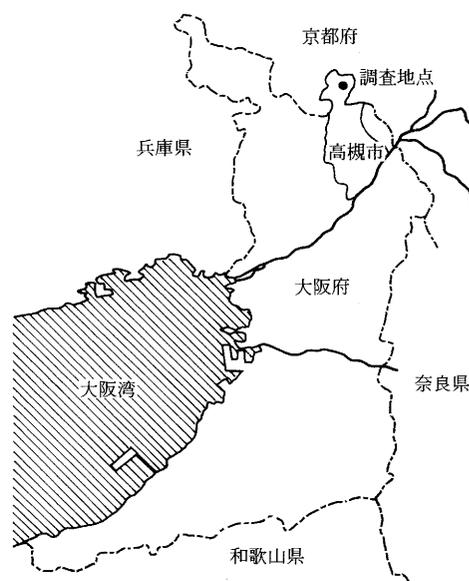
神宮寺西遺跡・田能城跡

図版13 出土遺物

田能城跡・田能北遺跡

第1章 はじめに

今回の発掘調査の経緯となった農地還元利活用事業（檜田地区）は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、農業経営の合理化並びに水田利用再編対策事業のため、府内の公共工事などによって生じた公共残土を利用し、埋め立てて整備する事業である。これらの一部の地区については、概に開始している。しかし、これらの地区は、大阪府教育委員会と本府環境農林水産部と協議した結果、周知の遺跡の範囲外であることと、地形的にみて遺跡が存在する可能性がないものと判断し、工事を実施している。



第1図 大阪府と調査地点

平成11年度から開始する地区（田能地区）については、当該地に周知の遺跡が存在することと、地形的に遺跡が存在する可能性が高いことから、本府教育委員会と本府環境農林水産部と協議を行い、遺跡の有無を確認するために、まず、遺跡確認調査を実施することとなった。

遺跡確認調査は、平成11年度上半期に工事が発注された個所について、切り土により地山が掘削される地域を中心に、試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。調査は、同年8月に実施し、その結果、周知の遺跡以外に新たな遺跡を発見し、遺跡名を神宮寺西遺跡とした。

神宮寺西遺跡の発掘調査については、切り土により遺構が破壊される地区（328㎡）に限って行った。同年10月に調査を開始し、同年11月に終了した。

その他の田能地区の遺跡確認調査については、同年12月から平成12年2月にかけて実施し、周知の遺跡の範囲外の地域に、多数の遺構・遺物を発見した。これらについては、それぞれ田能南遺跡の範囲拡大、田能北遺跡の範囲拡大、田能城跡の範囲拡大とした。

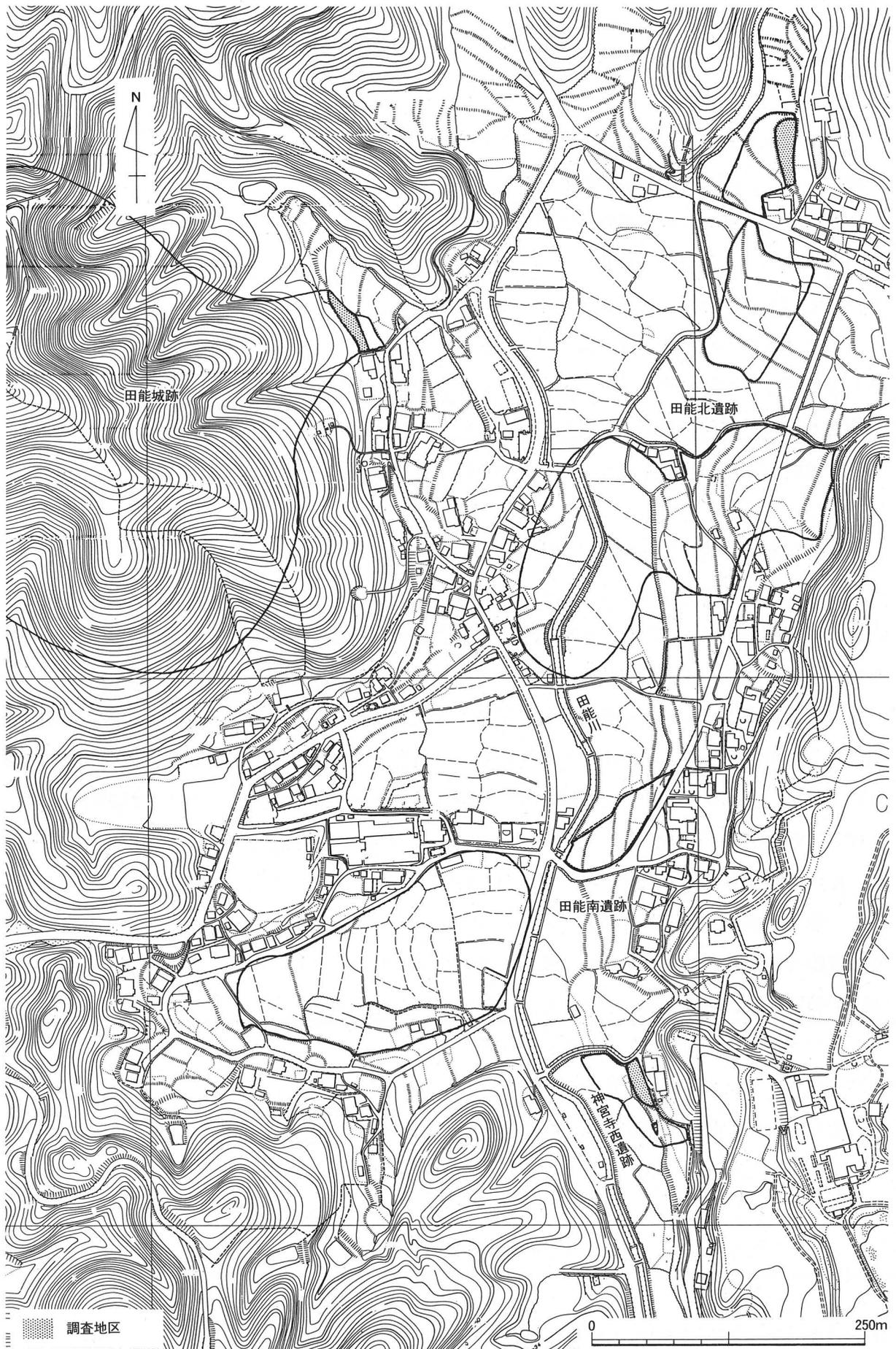
これらの中で、本府環境農林水産部が早期に工事を予定する区域内に存在する田能城跡、田能北遺跡について、まず調査を開始することとなった。

田能城跡（494㎡）については、平成12年2月に調査を開始し、同年3月に終了した。

田能北遺跡（613㎡）については、平成12年6月に開始し同年8月に終了した。

調査の方法は、耕作土をバックホウによって約0.2m除去した後、人力により約0.3mから0.35mの遺物包含層を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

註）大阪府教育委員会『田能地区遺跡確認調査概要』2000



第2図 周辺の遺跡図

第2章 位置と環境

地理的環境 今回発掘調査を実施した高槻市大字田能地区は、高槻市の北部、市街区域から約12km北の山間部に所在し、北摂山地の比高150m前後のおだやかな山々に囲まれた小規模な山間盆地（田能盆地）に立地する。北と西を亀岡市、東を京都市と接しており、大阪府の地形からいえば、北に瘤状に飛び出した形状をなしている。

田能盆地は、基本的には標高325mから355mの東西約0.3km、南北約1kmを測る細長い形状であるが、四方の山塊から派生する丘陵によって、盆地内にはいくつかの谷地形が存在する。

盆地のほぼ中央には、淀川へ注ぎ込む芥川の源流で、田能地区の北東部、府境に存在する標高約523.8mを測る明神ヶ岳付近を源流とする田能川が南流している。川沿いには丹波街道（府道高槻亀岡線）、北辺の東西を中世以来、丹波国田能庄と京都とを結ぶ主要街道（府道柚原向日町線）が通っている。

現況は、盆地のほとんどが水田であり、丘陵端部から田能川に下るように棚田が連なり、集落は、丘陵の端部に沿って営まれている。

歴史的環境 高槻市大字田能が所在する榎田地区は、旧国名では丹波国桑田郡に属する。鎌倉時代初期には、田能庄と呼ばれ、皇室領荘園群の中の七条院領38箇庄の一つであった。江戸時代のほとんどは丹波亀山藩領、明治以降京都府に属していたが、昭和33年に大阪府高槻市に編入合併された。

田能地区の北の丘陵に存在する榎船神社は、創建の時代は不詳であるが、社蔵の貞応元年・2年の年紀をもつ棟札によると、鎌倉初期の貞応元年（1222）に社殿の造営を行うとともに、神像と仏像の各2体を奉納したという。また、神社の南東約1kmには、宮寺の神宮寺が存在し、現在も神仏習合による宗教行事が行われている。神宮寺の本尊である大日如来座像は、平安時代後期ごろの作とみられ、高槻市の有形文化財に指定されている。

田能地区内の遺跡については、西の山腹標高473mを測る城山に、明智光秀が居住していた亀山城の支城であったと伝えられている、山城の形態をとる田能城跡が知られているのみであった。現在、田能城跡には、石垣の一部、井戸などが残存している。

その他の遺跡については、近年、高槻市教育委員会が実施した遺跡分布調査によって、田能南遺跡、田能北遺跡が確認されている。また、1999年度に大阪府営農地還元利活用事業（榎田地区）に伴い大阪府教育委員会が、遺跡確認調査を行った。その結果、新規発見の遺跡として神宮寺西遺跡。また、田能南遺跡、田能北遺跡、田能城跡の遺跡の範囲拡大によって、田能地区の盆地の約3分の1に遺跡が存在することが明らかとなっている。

これらの出土遺物から、この盆地が鎌倉時代を前後して大規模に開発されたことを物語っており、このことは、文献上からも確認できる。

第3章 神宮寺西遺跡の調査

第1節 概要

神宮寺西遺跡は、1999年度に実施した遺跡確認調査によって新たに発見された遺跡で、田能地区の盆地の南東端付近に存在する。遺跡は、東方向から派生する小尾根の端部付近を中心とする地域に存在し、西側には田能川が南流している。遺跡の東の山腹には、檜船神社の宮寺であったとされる神宮寺が存在する。

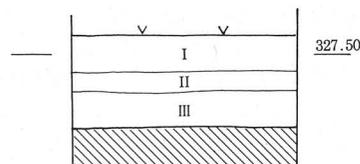
遺跡の範囲は小規模で東西約30m、南北約100mを測る。

今回の調査は、圃場整備によって遺跡が破壊される部分に限定して行い、調査区域は、遺跡の東北端部に位置する。調査区は、A、Bの2地区に別れ、調査面積は、328m²を測り、遺跡の範囲全体の約4分の1にあたる。

A地区で検出した遺構（第3図、図版1-1）は、建物2棟、柱穴多数、溝、土坑などである。A地区の東南に位置するB地区は、調査の結果、埋積谷にあつたため、遺構・遺物とも存在しなかった。

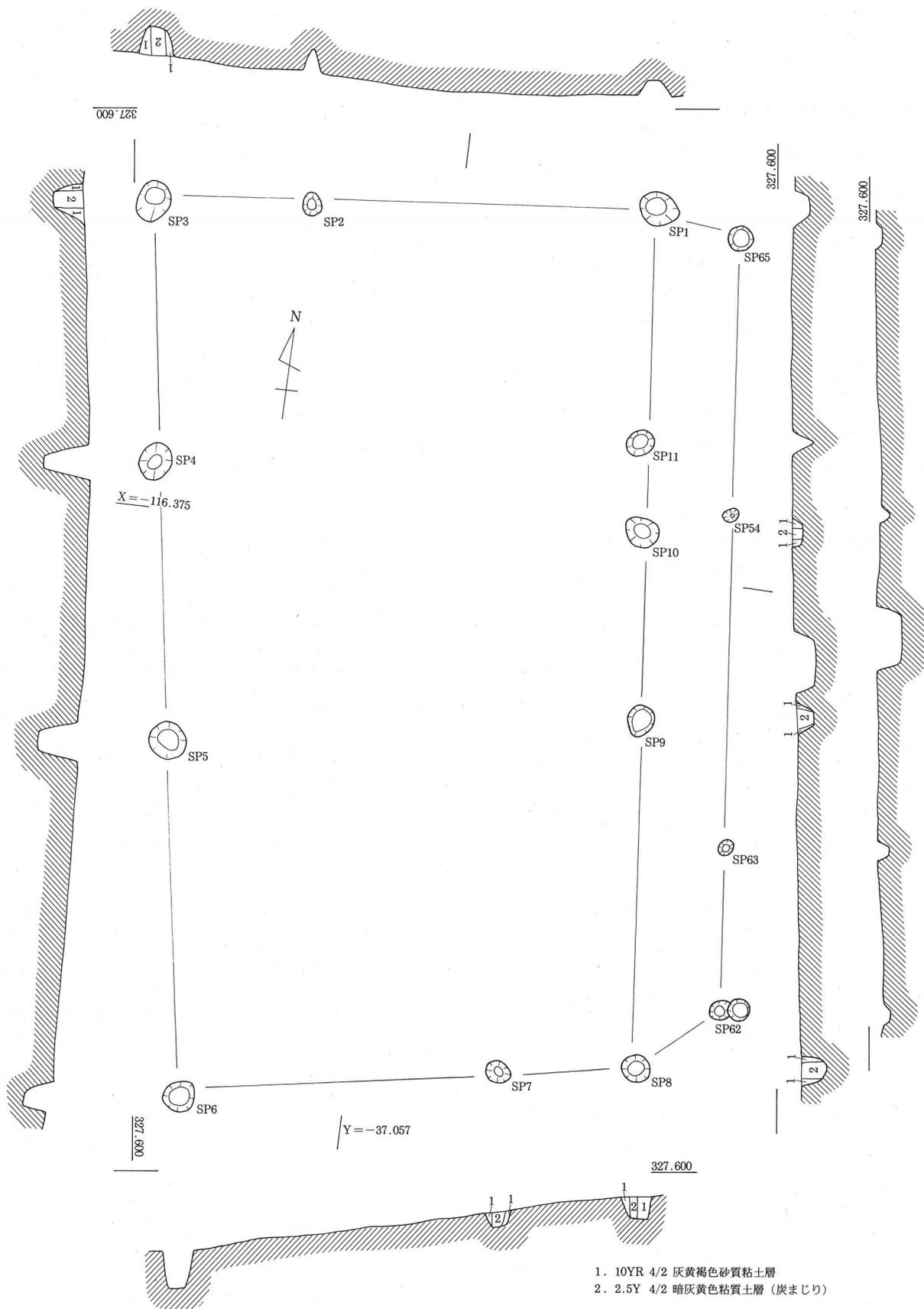


第3図 神宮寺西遺跡 平面図



- I. 耕土
- II. 床土
- III. 10YR 5/3 にぶい黄橙色粘質土層

第4図 神宮寺西遺跡 基本層序断面



- 1. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質粘土層
- 2. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質土層 (炭まじり)

0 2 m

第5図 神宮寺西遺跡 建物1平面・断面図

第2節 基本層序

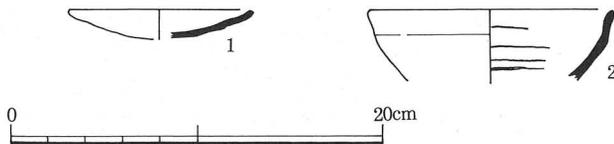
神宮寺西遺跡は、地形的に尾根の先端部付近にあたる。層序（第4図、図版1-2）は、基本的にほぼ同様な堆積状況を呈する。

以下各層の概要を記述する。

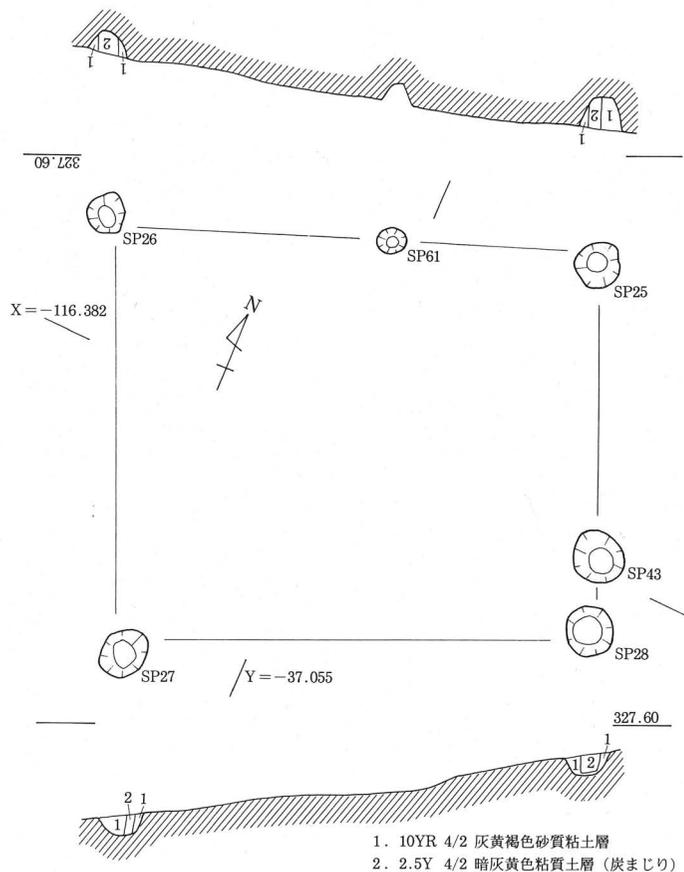
I層 耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

II層 耕土層の床土で、基本的に1層であるが、部分的に2層から3層に分けることができる。

III層 にぶい黄橙色粘質砂土層を基本とする層で、本遺跡の遺物包含層である。中世を基本とする遺物を含む。山側には、ほとんど存在せず、谷側に行くに従い厚くなる傾向を示す。層厚は、0.05mから0.3mを測る。



第6図 神宮寺西遺跡 建物出土遺物



第7図 神宮寺西遺跡 建物2平面・断面図

第3節 調査の成果

建物1（第5図、図版2-1~4）

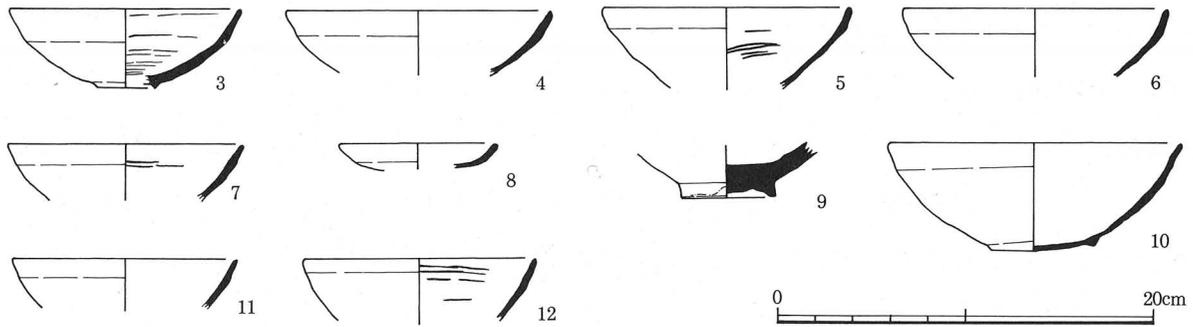
X = -116.375、Y = -37.057付近を中心とする、基本的に梁間1間（北側約4.4m、南側約4.0m）、桁行3間（東側約7.55m、西側約7.8m）の建物で、東側に庇と推定される柱穴が並ぶ。梁間には、異なる地点に0.3m前後、深さ0.25m前後を測る小柱穴が存在する。

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.37m、深さ0.15mから0.4mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.1mから0.15mを測る。

遺物は、SP11より土師器小皿（第6-1図、図版10-1）が出土している。

建物2（第7図、図版2-5~8）

X = -116.382、Y = -37.055付近を中心とする、基本的に梁間1間（東側約2.5m、西側約2.9m）、桁行1間（北側約3.25m、南側約3.1m）の建

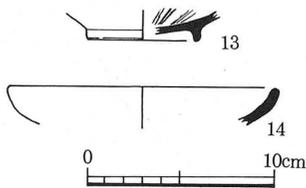


第8図 神宮寺西遺跡 遺構内出土遺物

物で、北側の桁行に、建物に付随すると推定される小柱穴（径約0.2m、深さ約0.15m）が存在する。柱穴は円形に近く、径0.25mから3.0m、深さ0.15mから0.2mを測る。遺物は、S P 27より瓦器碗（第6-2図）が出土している。ピット

S P 60（図版3-1） X=-116.3835、Y=-37.0516付近に存在する。ピットは円形に近い形を呈し、径約0.3m、深さ約0.07mを測る。当初は柱穴かと思われたが、ピット底から瓦器碗一個体（第8-11、図版10-11）が出土したこと、他の柱穴と比較して浅いことより、柱穴ではなく、埋納祭祀に関する遺構ではないかと考えられる。

S P 21 X=-116.3773、Y=-37.0543付近に存在する。径約0.35m、深さ約0.2mを測る。

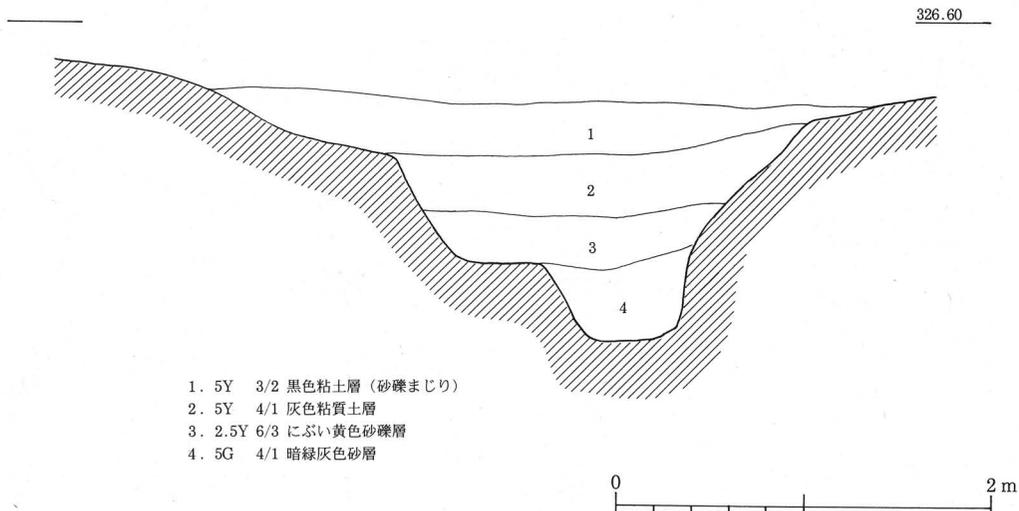


第9図 神宮寺西遺跡 溝1出土遺物

柱穴と考えられるが、対応する柱穴が存在しないことから、建物が建つには至らなかった。柱穴埋土より瓦器碗（第8-2~6図）、青磁碗（第8-7図）、土師器小皿（第8-8図）が出土している。

土坑1

X=-116.365 Y=-37.054付近を中心とし、長さ約1.0m、幅約0.9m、深さ約0.05mを測る。底面は平坦で、埋土に炭を含む。土坑内から瓦器碗（第8-9、10図）が出土した。



- 1. 5Y 3/2 黒色粘土層（砂礫まじり）
- 2. 5Y 4/1 灰色粘質土層
- 3. 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂礫層
- 4. 5G 4/1 暗緑灰色砂層

第10図 神宮寺西遺跡 溝1断面図

これらの遺構および遺物包含層であるにぶい黄橙色粘質土層から出土した遺物から12世紀後半を中心とする時期と推定される。

溝1（第10図、図版3-2、3）

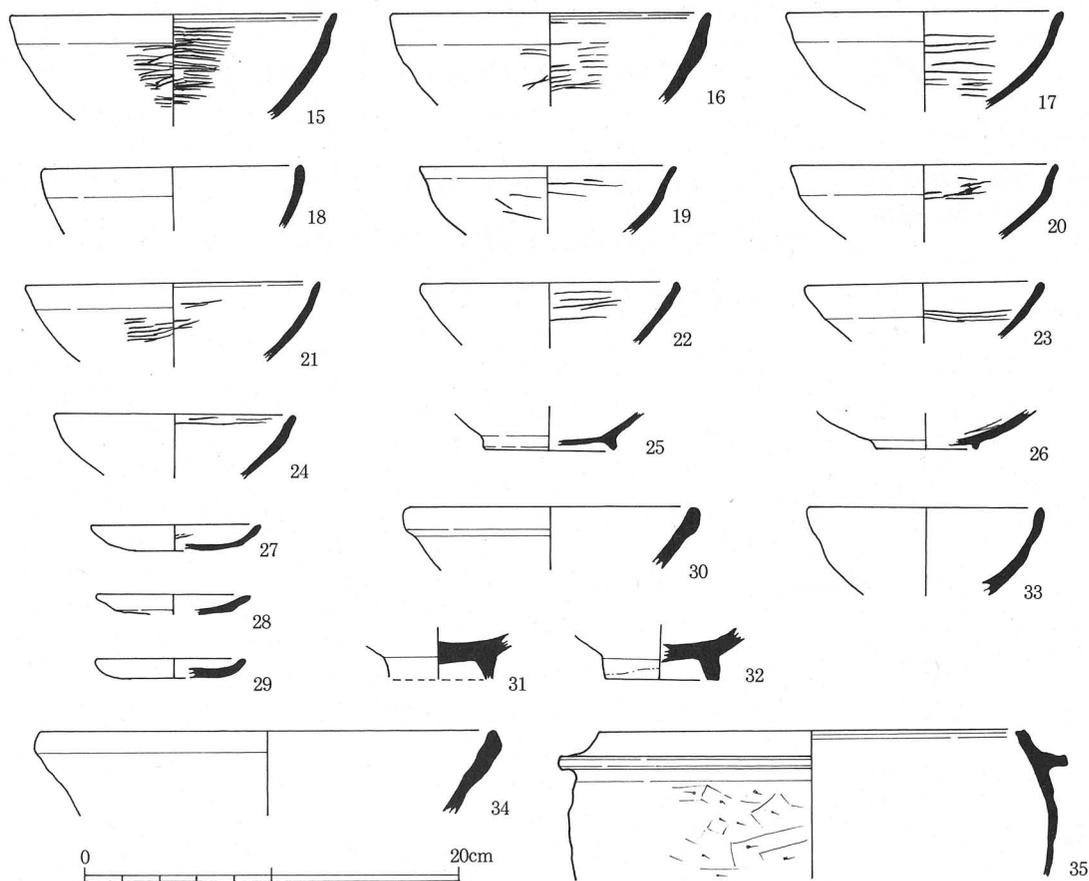
調査区の下段で検出した。屋敷跡が検出された上段との高低差は約1.1mを測る。溝は、幅約3.5m、深さ約1.26mを測り、断面「U」字形に近い形を呈する。このことから人工的なものと考えられる。溝の検出長は約8.0mであるが、溝底の高低差から南流し、方向から調査区西に存在する田能川に注いでいたと推定される。

溝内から出土した遺物は少量で、図化できたものは2点のみで、時期は10世紀と推定される。このことから、上段で検出した屋敷跡が存在した時には既に埋没していたものと考えられる。

小結

上段で検出した遺構は、丘陵の先端部の幅約10m、長さ約30mの間を切り開いて平坦地を作ったものと推定される。検出した2棟の建物は、軸方向がほぼ同一で、約1.2m離れて存在していることから、併存していたものと考えられる。建物の規模の違いから、北側の建物（建物1）は、母屋、南側の建物（建物2）は作業小屋（倉庫）と推定され、これらによって1軒の屋敷を構成していたものと考えられる。

これらより出土した遺物から時期は、12世紀後半から13世紀初頭にかけてのものと考えられる。



第11図 神宮寺西遺跡 遺物包含層出土遺物

第4章 田能城跡の調査

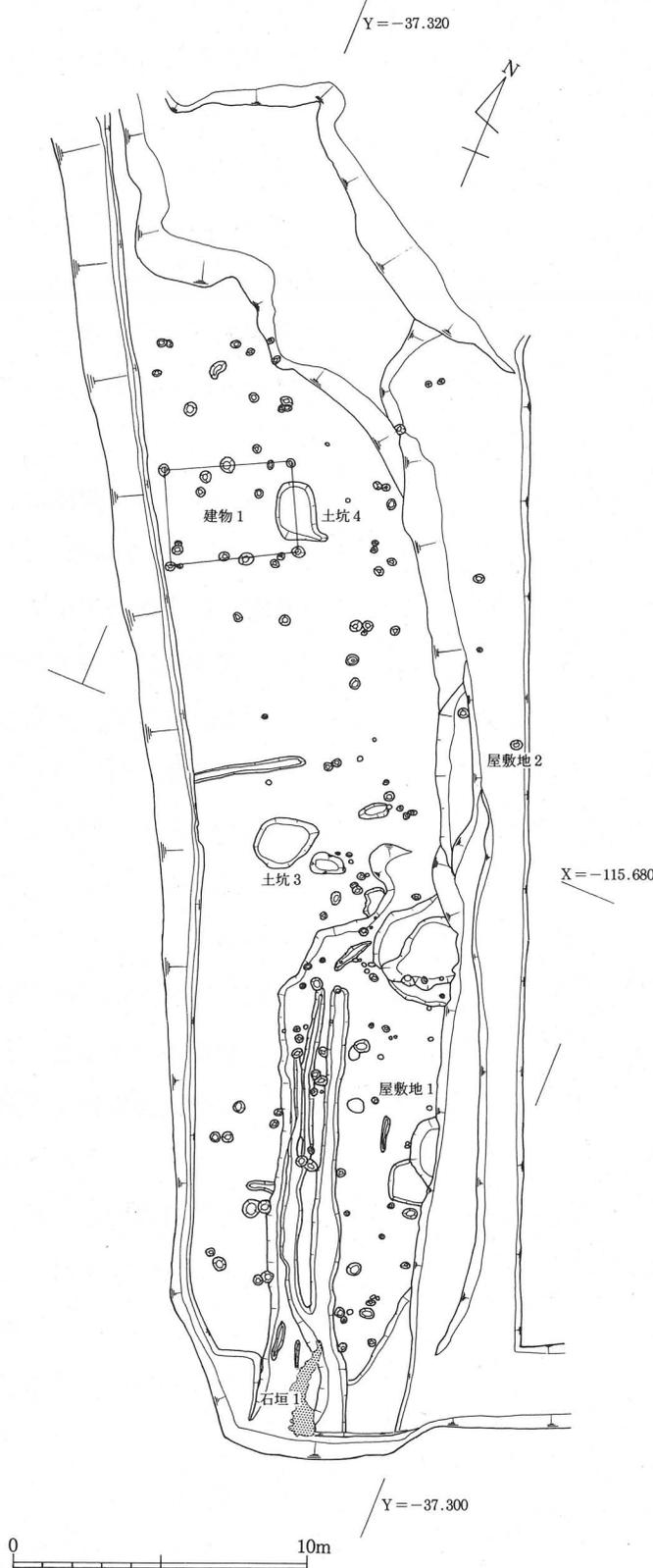
第1節 概要

田能城跡は、田能地区の盆地のほぼ中央部西に存在する標高約479.5m付近を頂とする山塊（城山）を中心とする遺跡である。

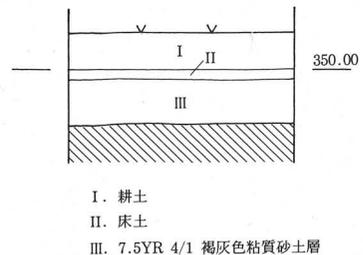
今回調査を実施した地区（第12図、図版4-1）は、西の山塊から派生する丘陵の裾部付近の標高349.5m前後を測る西斜面上の棚田に存在する。東には同じ山塊から舌状に派生する丘陵が存在し、それらによって谷が形成されている。

今回調査を実施した地区は、1999年度に行った遺跡確認調査によって、新たに遺構・遺物が確認され、遺跡の範囲が拡大した地域に存在し、調査面積は494m²を測る。

検出した遺構は、建物1棟、屋敷地と推定される平坦地2箇所、屋敷地に伴うと推定される溝3本、炉跡と推定される焼土2基、土坑5基、石垣1基、また、建物が建つには至らなかったが、柱穴が多数存在する。



第12図 田能城跡 平面図



第13図 田能城跡 基本層序断面図

第2節 基本層序

今回の調査地は、西の山塊から派生する丘陵の裾部付近にあたる。東部には同じ山塊から舌状に派生する丘陵が存在し、それによって谷を形成している。

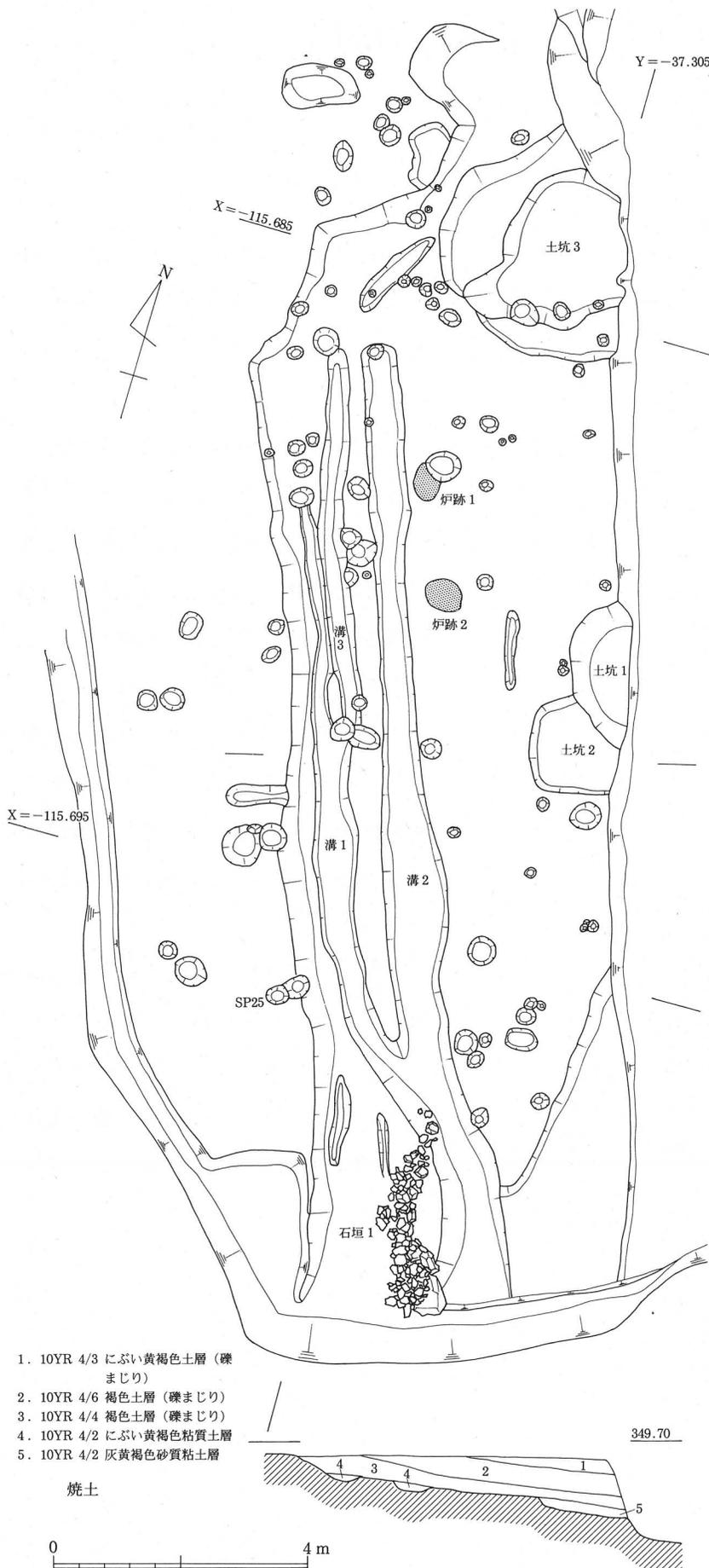
層序（第13図、図版4-2）は、基本的にほぼ同様な堆積状況を呈する。

以下各層の概要を記述する。

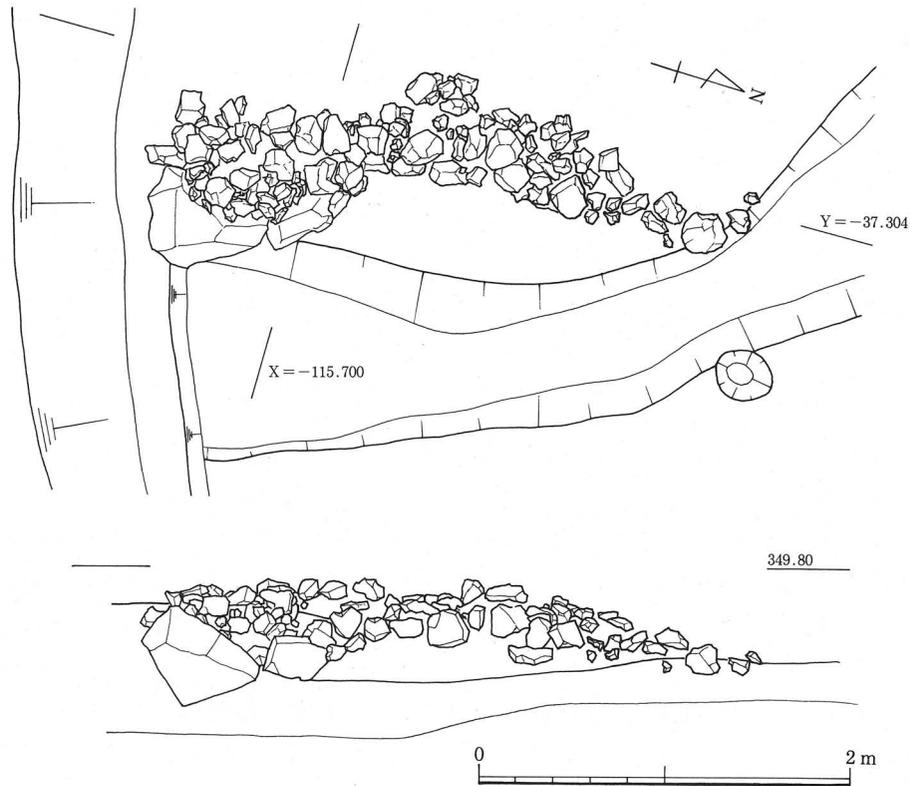
I層 耕土層で層厚は、約0.2mを測る。

II層 耕土層の床土で、基本的に1層であるが、部分的に2層から3層に分けることができる。層厚は、0.05mから0.1mを測る。

III層 褐灰色粘質砂土層を基本とする層で、本遺跡の遺物包含層である。中世を基本とする遺物を含む。基本的には1層であるが、部分的に2層から3層に分けることができる。調査区
の山側は、水田造成時に削平されたものと推定され、ほとん



第14図 田能城跡 屋敷地1平面・断面図



第15図 田能城跡 石垣平面・側面図

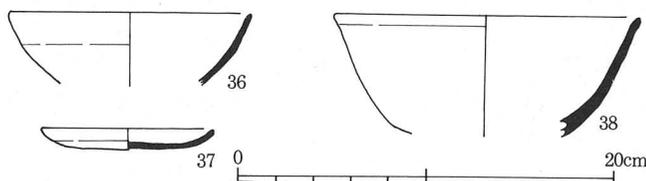
ど存在せず、谷側に行くに従い厚くなる傾向を示す。層厚は、0.05mから0.3mを測る。

第3節 調査の概要

屋敷地1

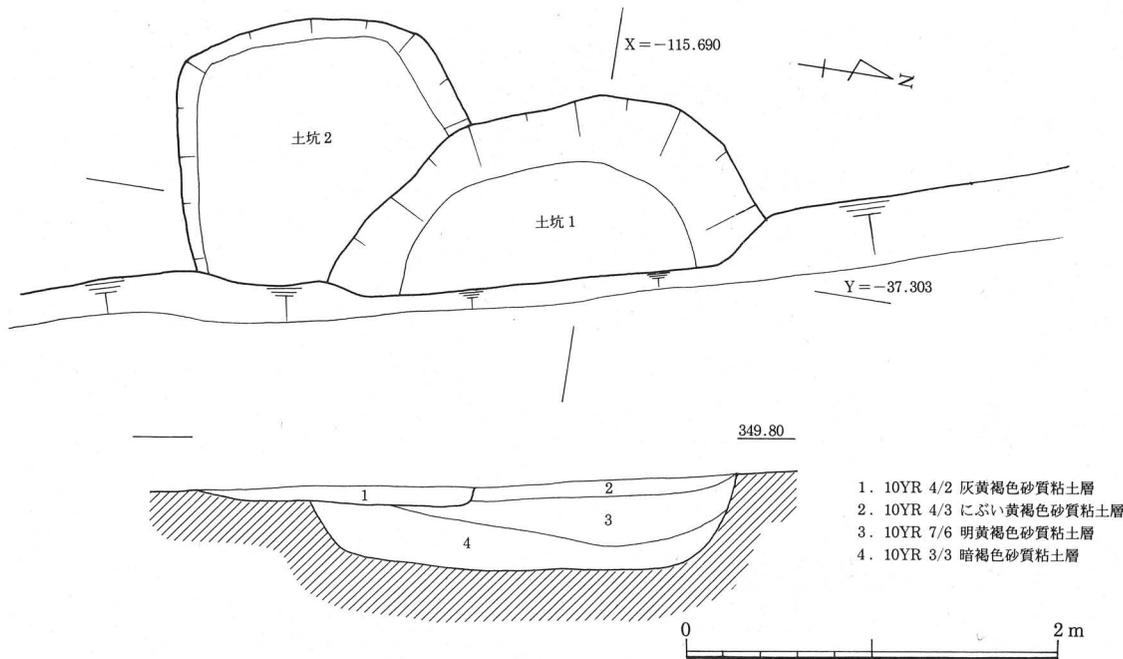
調査区の南側、 $X = -115.682$ から $X = -115.701$ 付近、 $Y = -37.305$ 付近を中心とする。南側は調査区外に伸び、東側は後世の水田造成時に削平を受けている。東西5.0m以上、南北17.8m以上を測る。屋敷地は丘陵斜面を削平して、平坦面を作り築造されている。地山面と西辺との高低差は約0.3mを測る。屋敷地内で検出した遺構は、土坑3基、屋敷地内の排水用に用いられたと推定される石垣1基、溝3本、建物が立つには至らなかったが、多数の柱穴、炉跡と推定される焼土2箇所などを検出した。

石垣1（第15図、図版5-1、2） 調査区の南端、 $X = -115.698$ から $X = -115.701$ 付近、 $Y = -37.304$ 付近で検出した。南側は、調査区外に延び、長さ3.5m以上を測る。石垣は、1段

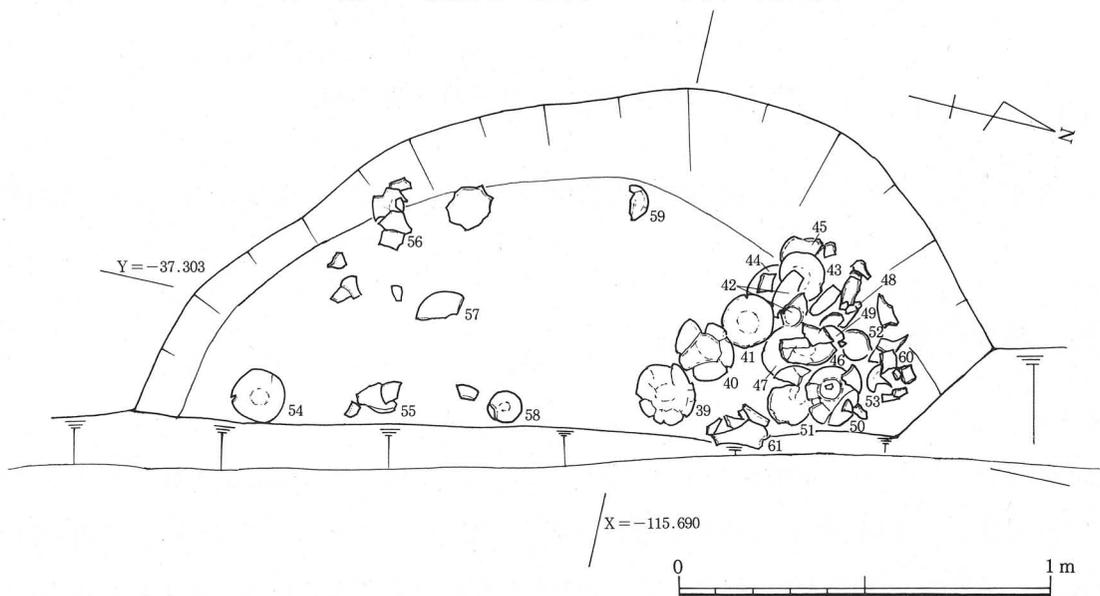


第16図 田能城跡 遺構内出土遺物

から最大5段程度積み上げ、北から南に行くに従い高くなる傾向が認められる。下段には屋敷の排水溝と推定される溝が存在し、石垣上段と溝との高低差は約0.8mを測る。屋敷の西側の段



第17図 田能城跡 土坑1・2平面・断面図

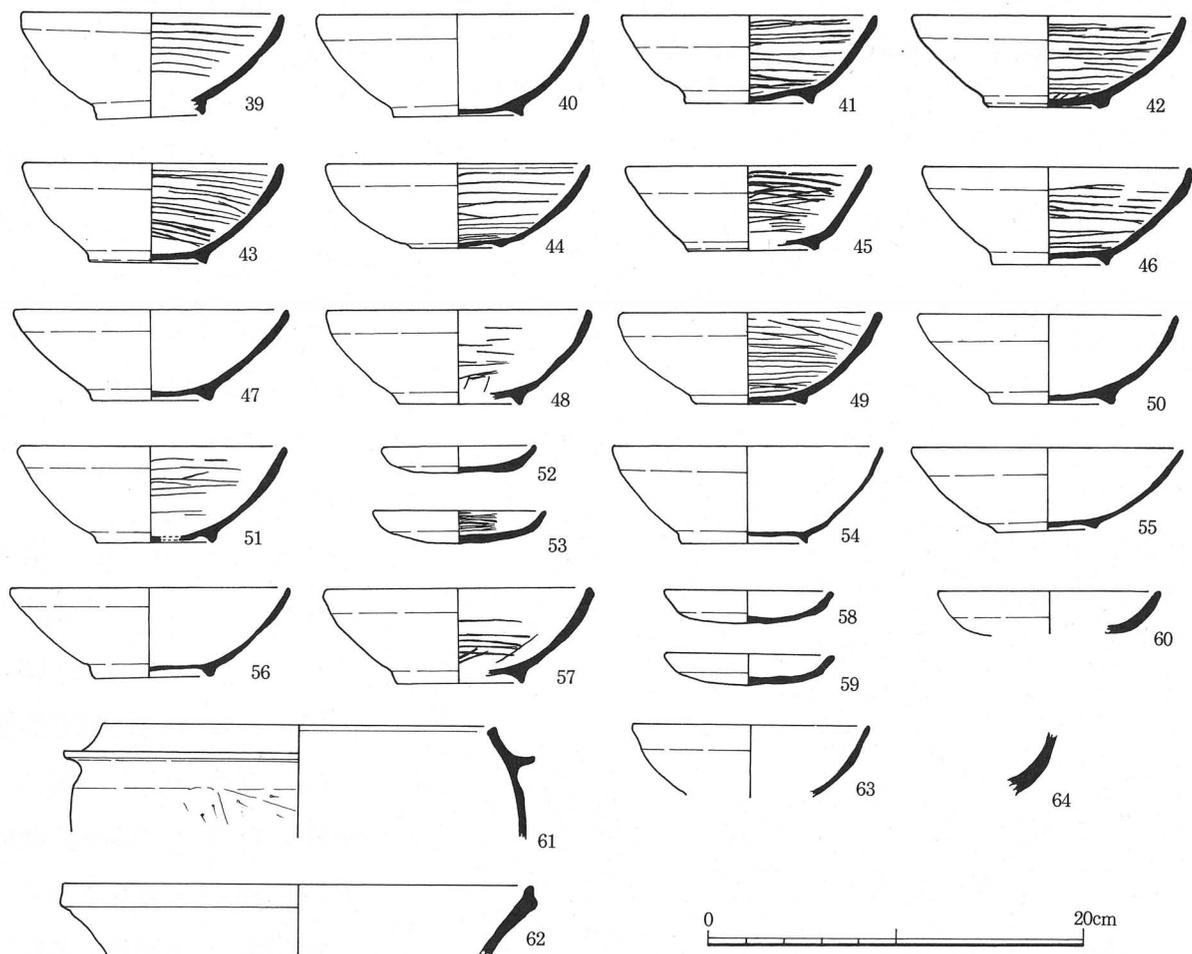


第18図 田能城跡 土坑1遺物出土状況図

から石垣までの間は約1.0mの平坦な部分が存在し、このことから外部と屋敷を繋ぐ道の役目をしていただのではないかと推定される。

溝（第14図） 屋敷地の西辺部下段に沿って検出した。検出状況から、少なくとも3回の掘り直しが認められる。溝1は、幅約0.5m、深さ約0.1m、溝2は、幅約0.7m、深さ約0.15m、溝3は、幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。平面、断面の観察の結果、溝2が最も新しく、溝1、溝3の順に古くなる。溝の用途は、検出位置より屋敷地内に入る水を防ぐ役目を果たしていたものと考えられる。溝内から出土した遺物は少量で、図化できたのは、溝1の青磁碗（第16-37図）、溝2の瓦器碗（第16-36図）のみであった。

土坑1（第17図、図版5-3・6-3） X = -115.690、Y = -37.303付近を中心とし、土



第19図 田能城跡 土坑1 出土遺物

坑の東、約5分の3は水田造成時に削平を受け欠失している。土坑は残存状況から円形に近い形を呈していたものと推定される。径約2.6m深さ約0.4mを測る。土坑内の下層（暗褐色砂質粘土層）上面から多量の土器が出土した（第18図、図版6-1）。特に土坑北側の一角から瓦器碗13個（第19-39~51図、図版10-39~46、図版11-47・49~51）、土師器小皿1個（第19-52図、図版11-52）、瓦器小皿1個（第19-53図、図版11-53）が集中して出土した（図版6-2）。土坑検出状況から掘削中においては気づかなかったが、長方形に配置されていたことから、箱状のものに入れられていたものと考えられる。これら以外に瓦器碗（第19-54~57図、図版11-54~57）、土師器小皿（第19-58~60図、図版11-58）、土師器羽釜（第19-61図）などが出土している。下層の暗褐色砂質粘土層からは少量であるが瓦器碗（第19-63図）、青磁碗（第19-64図）、須恵器摺鉢（第19-62図）などが出土している。時期は14世紀前半と推定される。

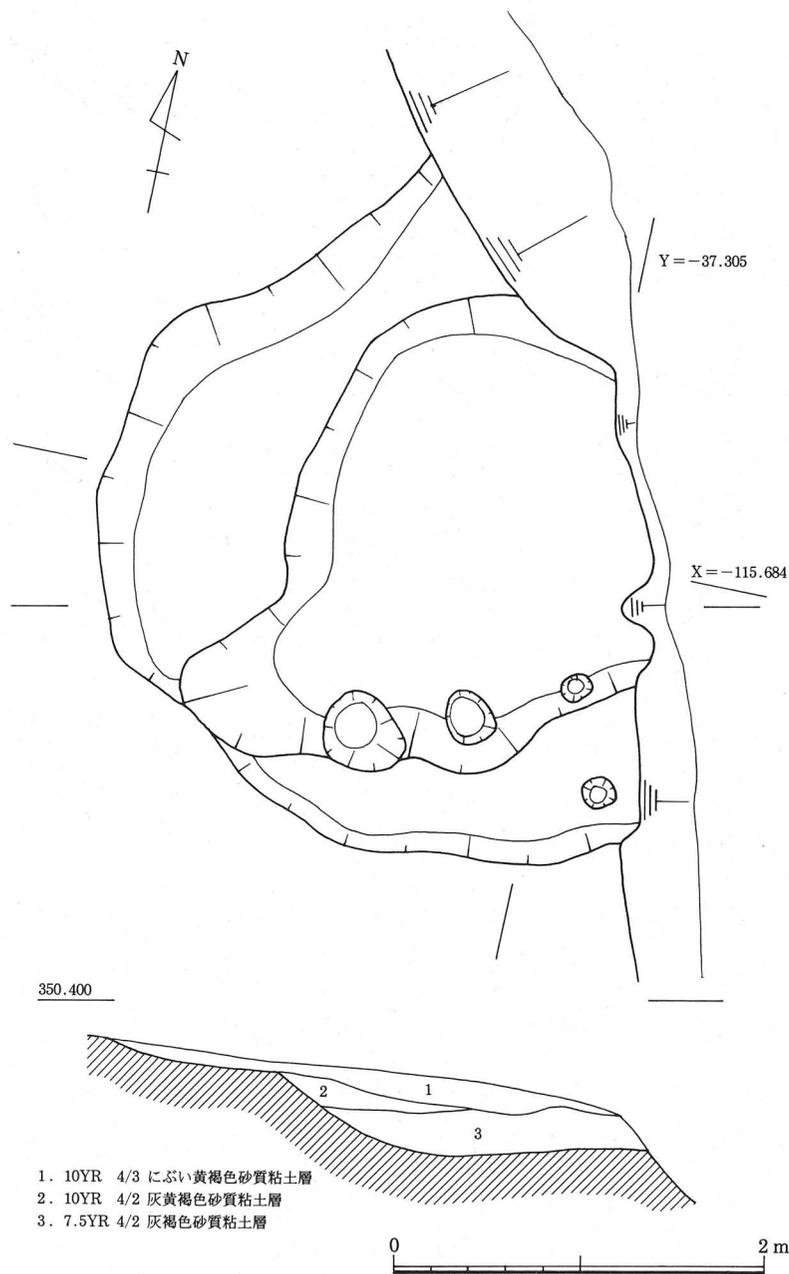
土坑2（第17図、図版5-3・6-3） X=-115.6915、Y=-37.303付近を中心とし、土坑1と切り合って存在する。平面及び土層断面観察の結果土坑2が新しい。土坑1と同様に、東側は水田造成時に削平を受け欠失している。土坑は隅丸方形ないしは隅丸長方形に近い形を呈している。南北約1.5m、東西1.4m以上、深さ約0.1mを測る。出土した遺物は極少量で、図化できるものはなかった。

土坑3（第20図、図版7-1・2） 屋敷地の北端、 $X=-115.684$ 、 $Y=-37.305$ 付近を中心とし、東側は水田造成時に削平を受け欠失している。土坑は円形に近い形を呈していると推定

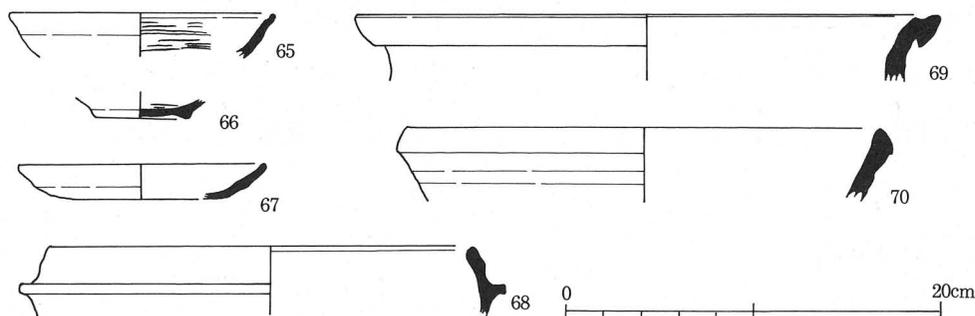
される。掘り方は二段になっており、上段のプランは径約3.5m、下段は2.3m、深さ0.4mを測る。上段と下段の間には幅0.3mから0.7m、検出面からの深さ約0.1mの地点にテラス状のフラットな面が存在する。

土坑内から出土した遺物（第21図）は少量で、図化できたのは、瓦器椀（65・66）、土師器小皿（67）、須恵器甕（69）、須恵器摺鉢（70）、土師器羽釜（68）である。時期は14世紀前半と推定される。

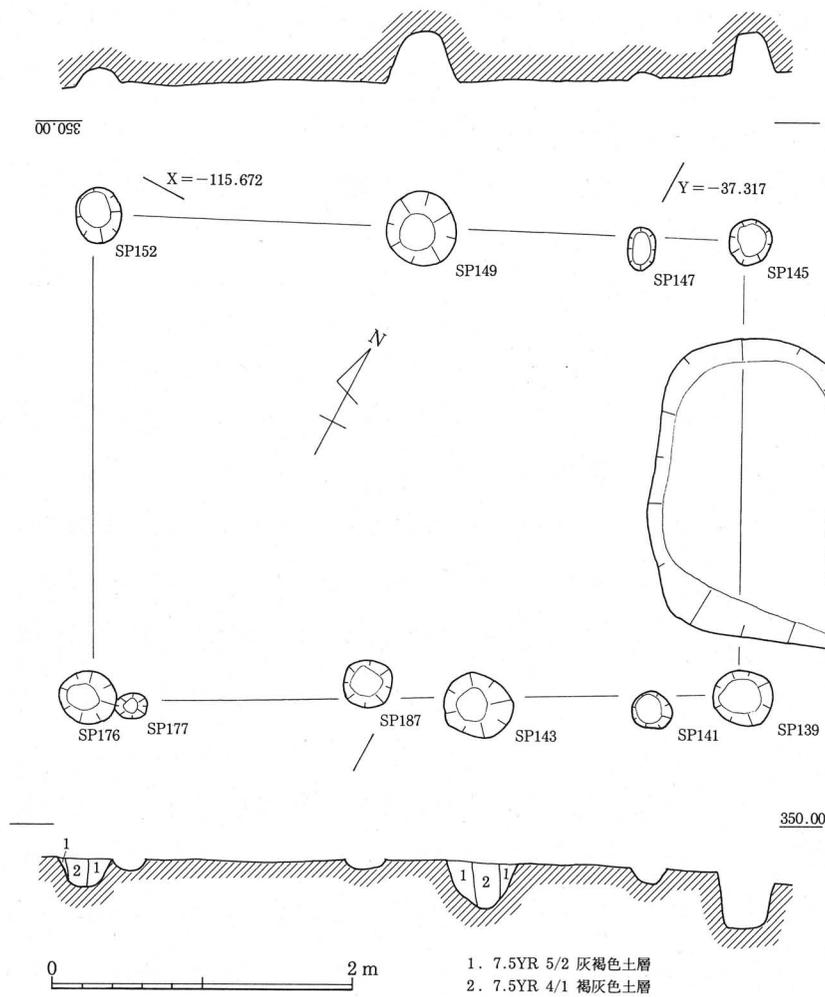
柱穴群 屋敷地内で多数の柱穴を検出したが、建物が建つには至らなかった。中には柵列と推定される配列も存在するが、屋敷地の大半が削平を受けているため、確定するには至らなかった。径0.15mから0.4m、深さ0.05mから0.3mを測る。また、柱穴の中には杭跡と推定される径



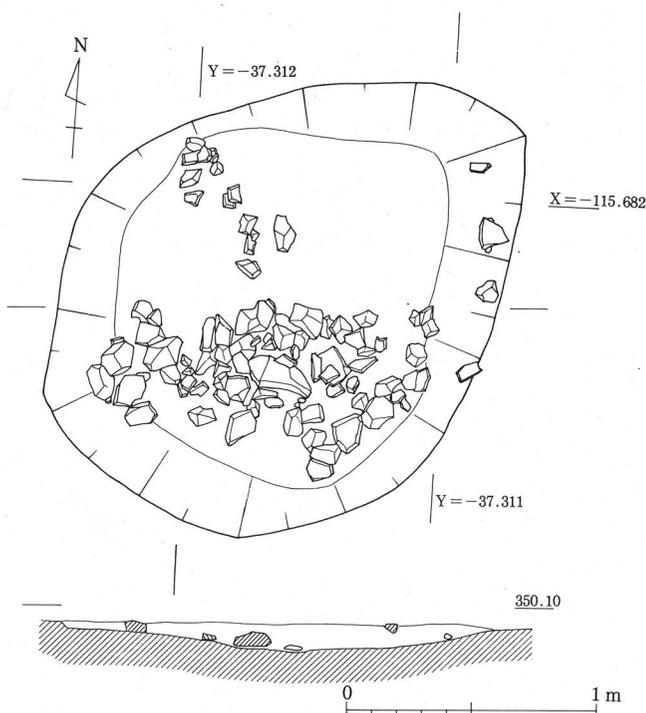
第20図 田能城跡 土坑3平面・断面図



第21図 田能城跡 土坑3出土遺物



第22図 田能城跡 建物1平面・断面図



第23図 田能城跡 土坑4平面・断面図

0.1m以下の小柱
穴も存在する。

炉跡 屋敷地の北
側、 $X = -115.688$ 、
 $Y = -37.3065$
(炉跡1)と $X =$
 -115.690 、 $Y =$
 -37.306 (炉跡2)
の2カ所で検出し
た。地山の周辺が
火を受けて赤褐色
を呈していること
から炉跡の可能性
が高いと判断した。
炉跡1は、平面で
楕円形に近い形を
呈し、長径約0.6
m、短径約0.4m
を測る。炉跡2は、
平面で円形に近い

形を呈し、径約0.5mを測る。用途は、
鍛冶炉とも考えられるが、周辺から鉍滓
が出土していないことから、現在の所不
明である。

屋敷地2 (第12図)

$X = -115.681$ 、 $Y = -37.306$ 付近に
存在する。遺構の大半は水田造成時に削
平を受け欠失し、南北約6.0m以上、東
西約1.3m以上を測る。テラス面の長さ5.
5m以上、幅0.7m以上を測る。屋敷地内
で検出した遺構は、柱穴1個のみである。
屋敷地は丘陵斜面を削平して、平坦面を
作り築造されている。地山面と西辺との
高低差は約0.45mを測る。

建物1 (第22図、図版4-3~6)

X=-115.672、Y=-37.317付近を中心とする、基本的に梁間1間(約3.1m)、桁行2間(約4.4m)を測る。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.45mから0.3m、深さ0.1mから0.35mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.15m前後を測る。

遺物は、極少量出土したが、図化できるものはなかった。時期は、周辺の遺構及び遺物包含層から出土した遺物により14世紀前半と推定される。

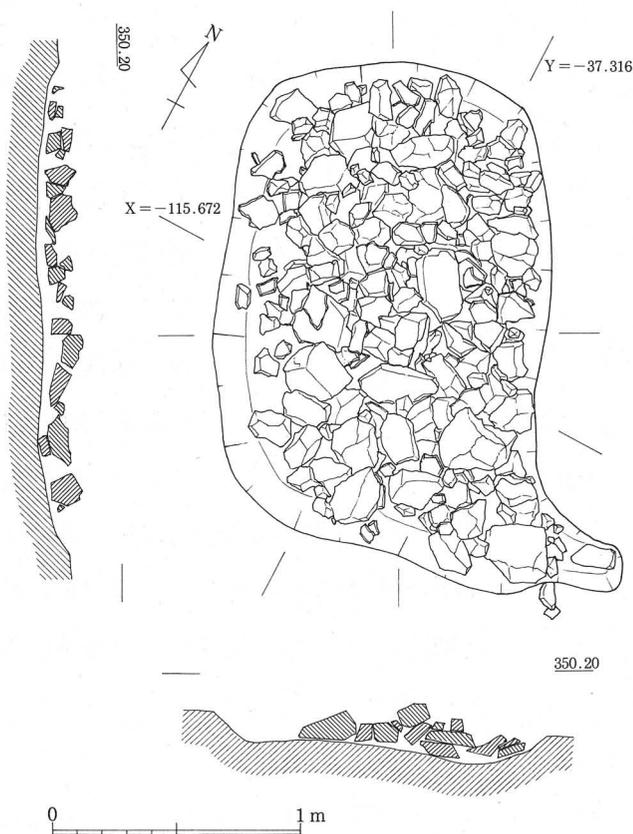
土坑4 (第23図)

X=-115.681、Y=-37.3115付近を中心とする楕円形に近い形を呈し、長径約2.1m、短径約1.7mを測る。底部はほぼフラットな面を呈し、深さ約0.1m前後を測る。用途は不明であるが、底面の南半分には0.3mから0.05m程度の石が検出された。石材は周辺の地山内に存在するもの

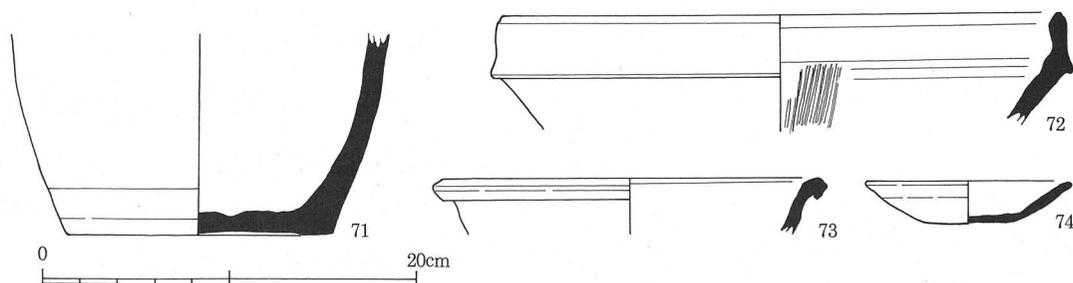
と同様な質のものである。遺物は極少量出土したが図化できるものはなかった。時期は、土坑5の埋土と同様の色調と質を呈していたため18世紀前期のものと考えられる。

土坑5 (第24図、図版7-4~6)

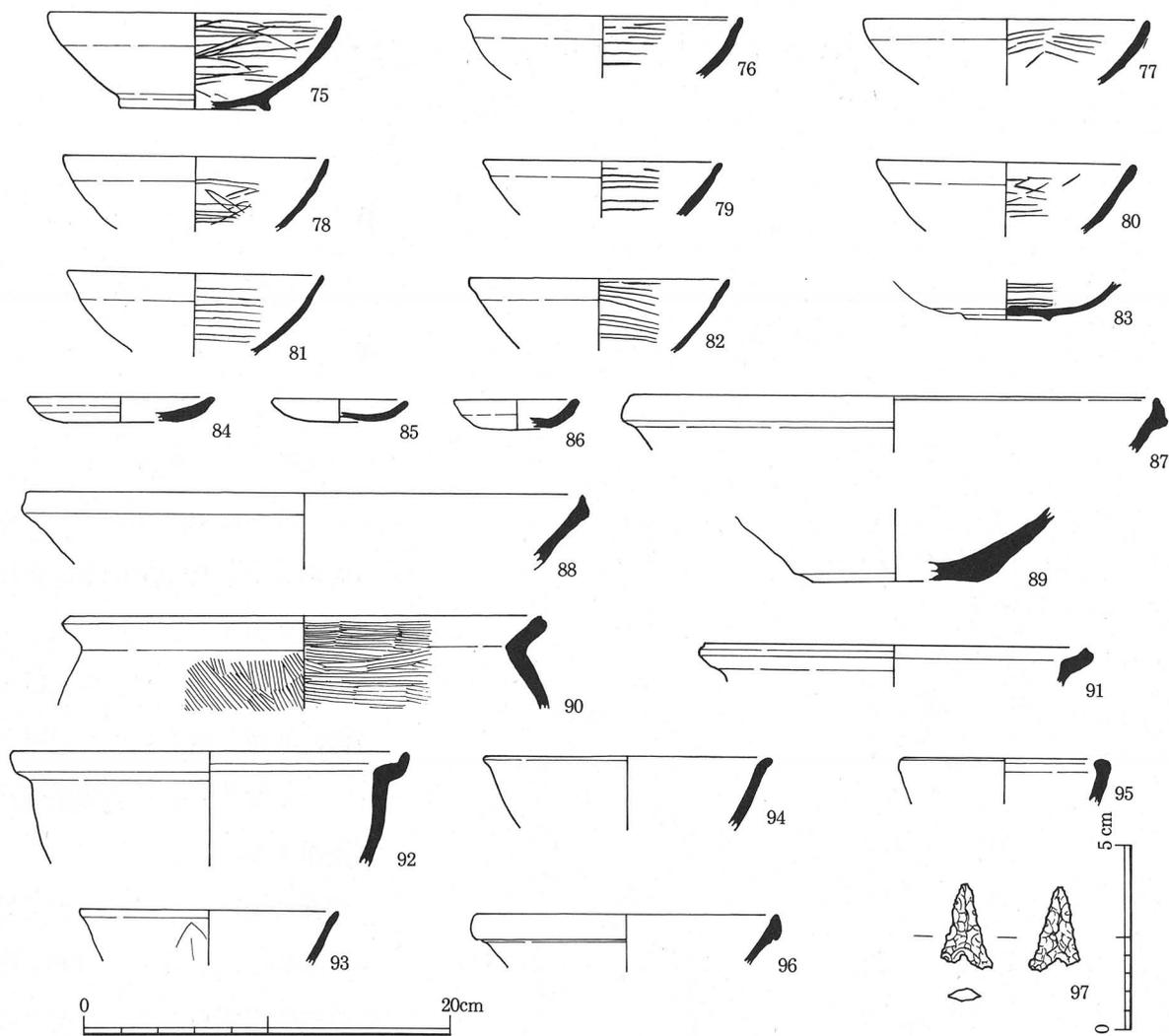
X=-115.672、Y=-37.316付近に存在する。平面形は隅丸長方形に近い形を呈し、長さ約1.95m、約幅1.3mを測る。東南隅において溝状に約0.35m程度外方に伸びる。底面はほぼフラットで土坑内には無数の石が敷き詰められている。石の表面は火の影響を受けて赤褐色を呈しているものが多く、石材の配置状況は平面観察の結果、長さ1.5m、幅約0.8m、方形に配置した後外側の石を置いているようにみられる。石材は周辺の地山内



第24図 田能城跡 土坑5 平面・断面図



第25図 田能城跡 土坑5 出土遺物



第26図 田能城跡 遺物包含層出土遺物

に存在するものと同様な質のものである。石材の中には、石臼片を転用したものも2個体ほど認められる。埋土には炭と灰が認められ、土坑を使って火を使うなんらかの作業が行われていた可能性が認められる。

出土した遺物(第25図)は、壺片(71)、備前焼摺鉢(72)、土師器小皿(74)、鉢の小片(73)が出土している。時期は、出土遺物から江戸時代18世紀前後のものと考えられる。

小結

今回検出された大半の遺構は、14世紀初頭の集落跡であり、16世紀後半に明智光秀が築城したと伝えられる本来の田能城跡とは、時期、性格が全く異なっている。そのことから、田能城とは性格が異なるものと考えられる。このことと、地形的にみると、田能城の存在する丘陵と近接しているが、現在の所遺跡の範囲には含まれていないが、丘陵のすそを巡る別の遺構群が存在する可能性が高いと考えている。

第5章 田能北遺跡の調査

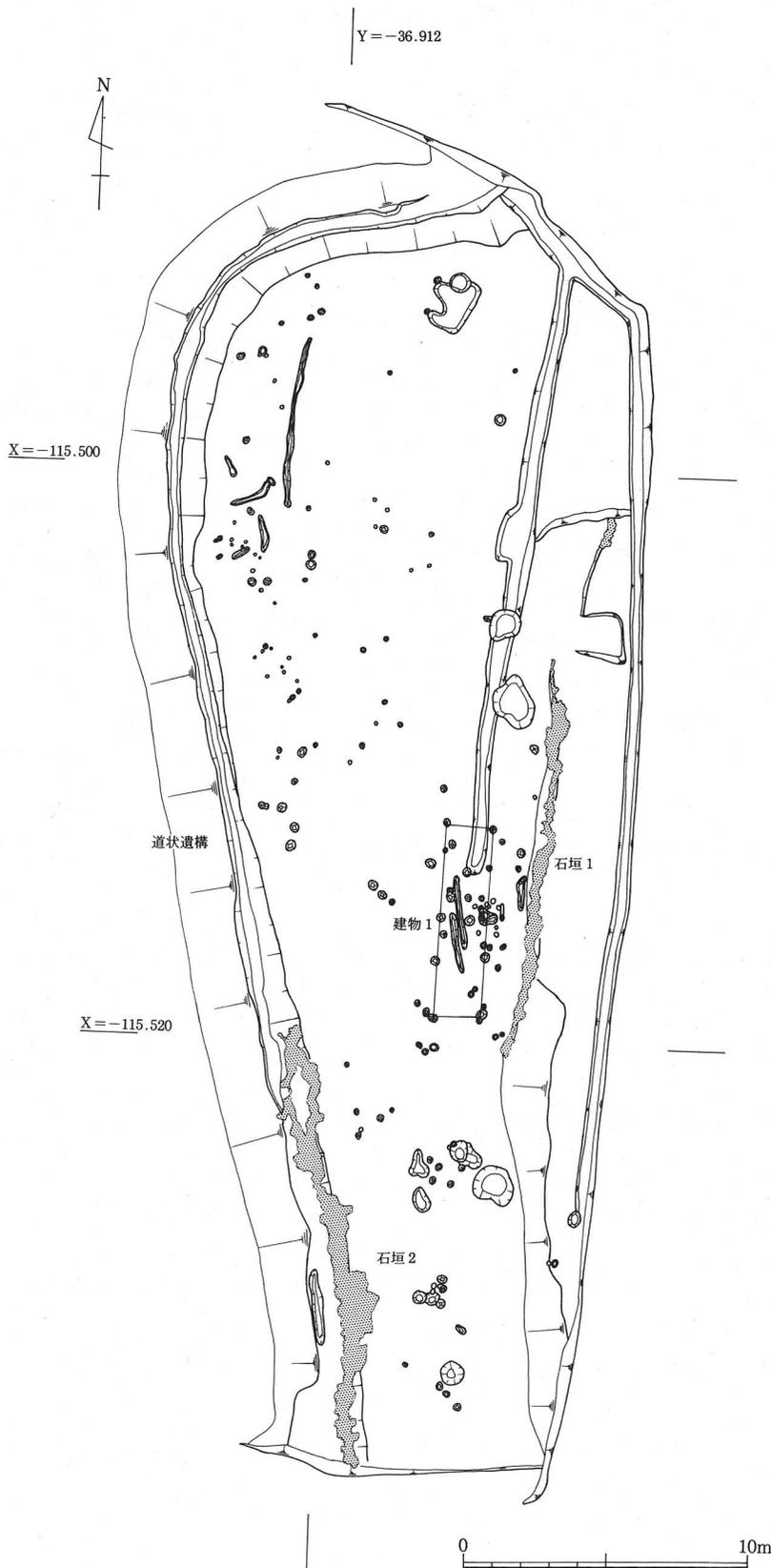
第1節 概要

田能北遺跡は、田能地区の北側に広がる遺跡で、基本的に田能川の東岸に位置する。調査地区（第27図、図版8-1）は、北の山塊から南へ派生する尾根の端部付近、標高約352m前後を測る東斜面上に存在する。

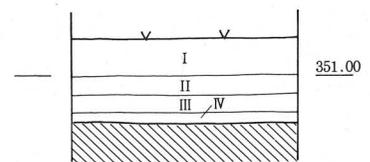
西側の丘陵上には、鎌倉時代初期に社殿を造営したと記載されている棟札が伝わる檜船神社が存在する。

調査地区は、本遺跡の中で最も北の高所に位置し、1999年度の遺跡確認調査によって新たに遺構・遺物が確認され、遺跡の範囲が拡大した区域に存在し、調査面積は613m²を測る。

検出した遺構は、建物1棟、石垣2基、道状遺構1本、他に柱穴、土坑、杭跡などがある。



第27図 田能北遺跡 平面図



- I. 耕土
- II. 10YR 6/3 にぶい黄褐色砂質粘土層
- III. 10YR 6/6 明黄褐色砂質粘土層
- IV. 10YR 3/2 黒褐色砂質粘土層

第28図 田能北遺跡 基本層序図

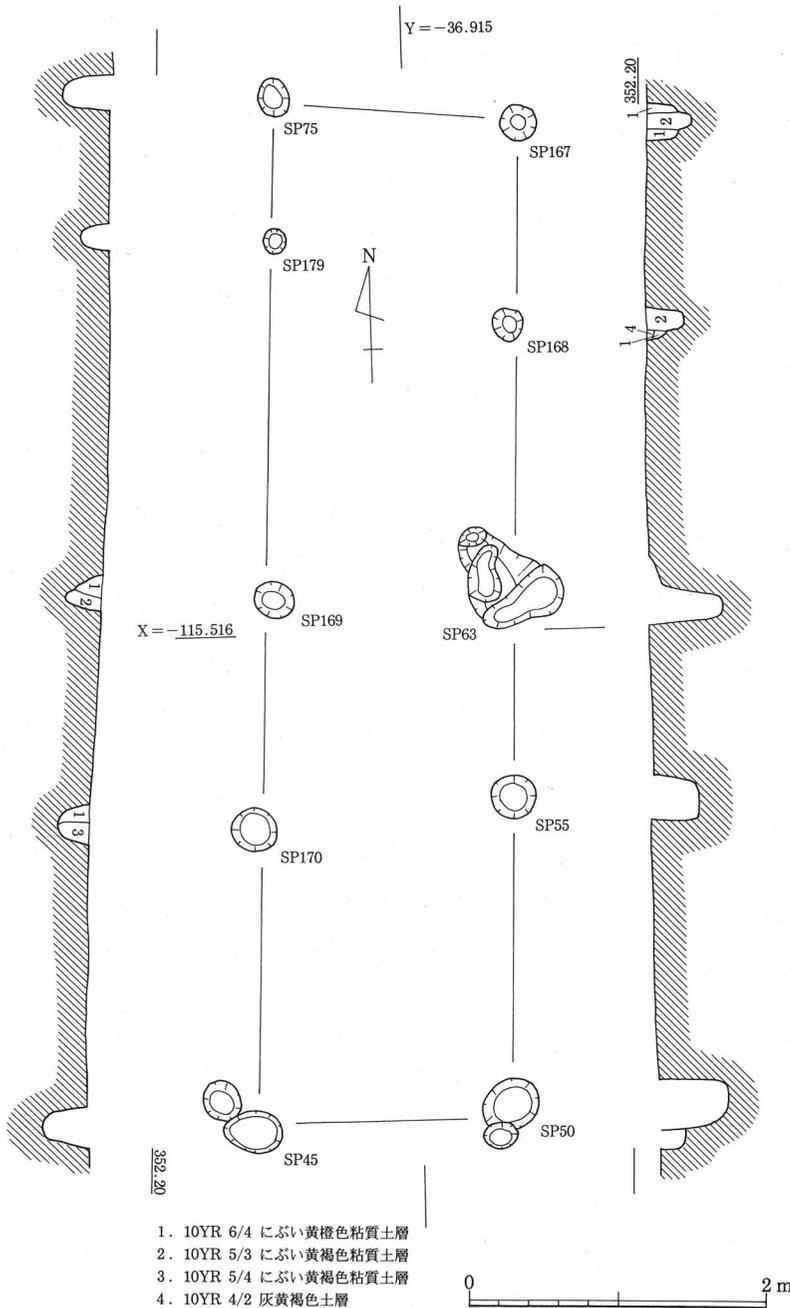
第2節 基本層序

今回の調査地は、地形的に谷の開口部付近にあたる。層序（第28図、図版8-2）は、基本的にはほぼ同様な堆積状況を呈する。

以下各層の概要を記述する。

- I層 耕土層で、層厚は、約0.2mを測る。
- II層 耕土層の床土である。層厚は、約0.1mを測る。
- III層 黒褐色粘質砂土層を基本とする層で、江戸時代と推定される。

IV層 明黄褐色粘質砂土層を基本とする層で、本遺跡の遺物包含層である。中世を基本とする遺物を含む。基本的には1層であるが、部分的に2層から3層に分けることができる。山側には水田造成時に削平されたものと推定され、ほとんど存在しないが、谷側に行くに従い厚くなる傾向を示す。層厚は約0.1mを測る。



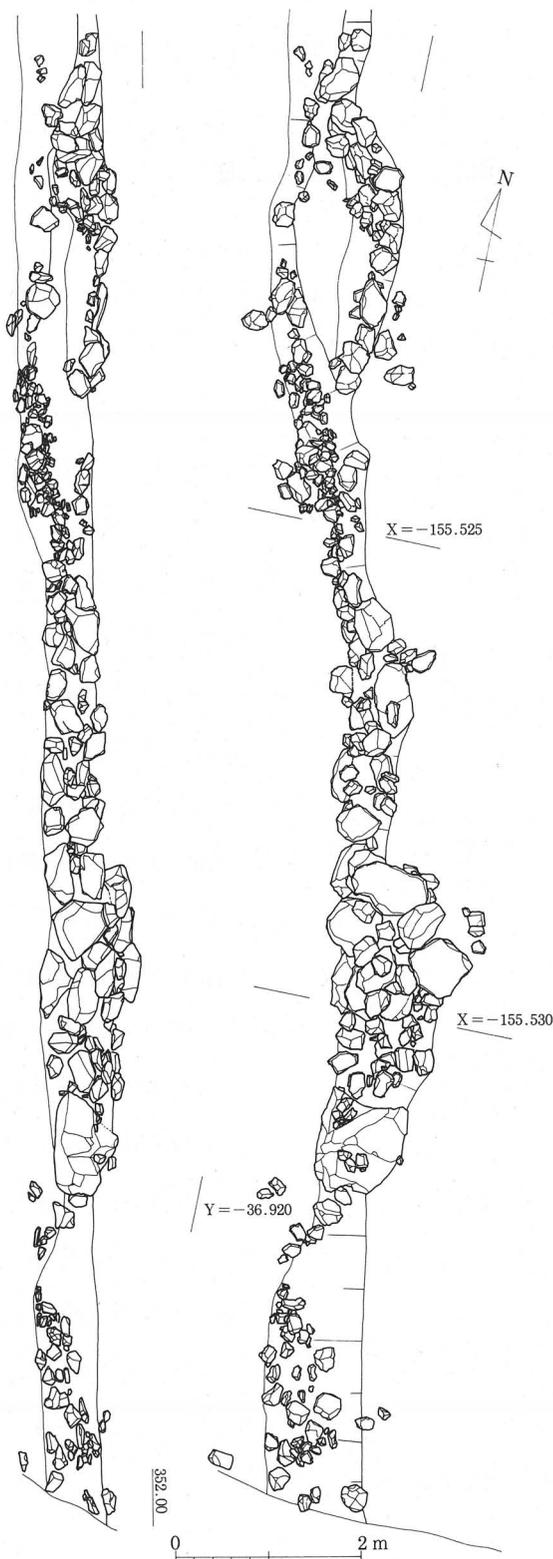
第29図 田能北遺跡 建物1平面・断面図

いが、谷側に行くに従い厚くなる傾向を示す。層厚は約0.1mを測る。

第3節 調査の成果

建物1（第29図、図版8-3）

調査区中央のやや南側、 $X = -115.516$ 、 $Y = -36.915$ 付近を中心とする、基本的に梁間1間（約1.7m）、桁行4間（約6.8m）を測る、細長い建物である。桁行の柱間は均等ではなく、長さ1.0mから2.4mを測る。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.35mから0.15m、深さ0.45mから



第30図 田能北遺跡 石垣1平面・断面図

0.2mを測る。柱痕は、土層断面観察の結果、径0.1m前後を測る。

柱穴内から全く遺物は出土しなかったが、周辺の出土遺物から建物の時期は、13世紀中頃と推定される。

石垣1（第30図、図版9-1～2）

石垣は、調査区の南西端、 $X = -115.5197$ から $X = -115.535$ 付近、 $Y = -36.919$ 付近で西側の水田との境の段に沿って検出した。石垣は、現地表面に存在する段を機械によって、幅0.5mから1.0m程度表土掘削を行った時点で検出した。掘削時に多量の石材が存在したことから、現地表面の段にも石垣が積まれていたと推定される。このことからこれらの石材は、石垣1が存在していた段を補修したものと考えている。

石垣の南側は、調査区外に延び、長さ16m以上を測る。北側は、部分的に石材は認められるものの石垣は存在しなかった。石垣の中央やや南、 $X = -115.532$ から $X = -115.524$ 付近までは、比較的大きな石が整然と積み上げられている。石材は、長さ約0.5m、幅約0.4m、高さ約0.3m、最大で長さ約1.1m、幅約0.7m、高さ約0.9mの石を用い、最大4段（高さ約1.1m）程度積み上げている。他の地点ではその地点よりも小さな石（長さ約0.5m、幅約0.4m、高さ約0.3m）を用いており、不規則に積んでいる。

石材は、周辺の地山内に存在するものと同系統のものであることから周辺で集められたものであろう。

また、石垣は、この周辺の丘陵斜面を耕作地にするためいくつかの平坦地を作り、その間の土砂の流失を防ぐために積まれたものと考えている。

時期は出土遺物から江戸時代（18世紀前後）に築造されたものと考えられる。

石垣 2 (第31図、図版 9-3)

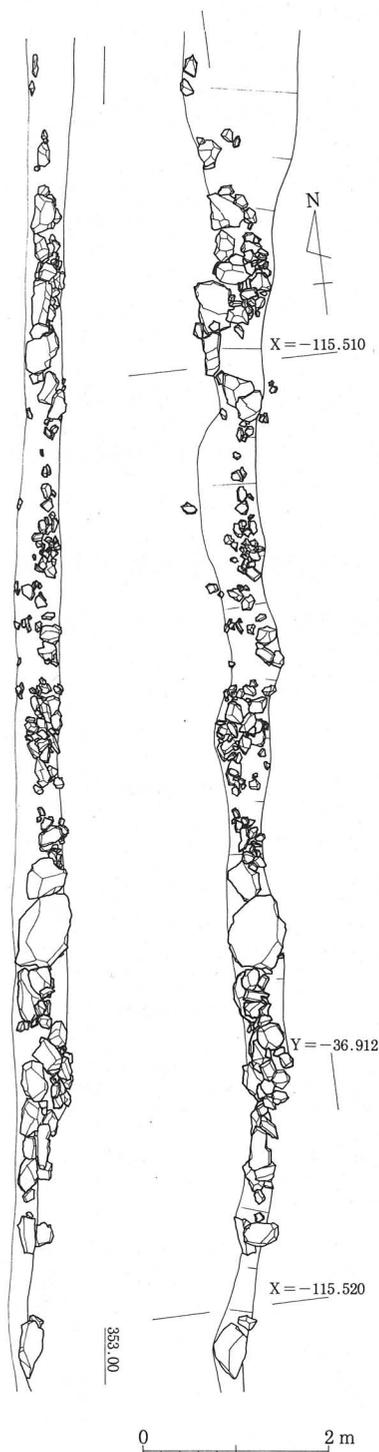
石垣は、調査区の東側中央付近、 $X = -115.507$ から $X = -115.5205$ 付近、 $Y = -36.9125$ 付近で検出した。石垣の北側は後世の削平、南側は土砂の流出を受けたものと推定され、検出したのは全長約14.0mの間のみであった。石垣は、現地表面に存在する段を機械によって幅2.0m程度表土掘削を行った時点で検出した。また、掘削時に多量の石材が存在したことから、現地表面の段にも石垣が積まれていたものと推定される。これらは、石垣1が現在のものと近接しているの

に対して、石垣2は、それより離れて奥にあることから、石垣2が存在していた段を、改めて作り直したものと考えている。

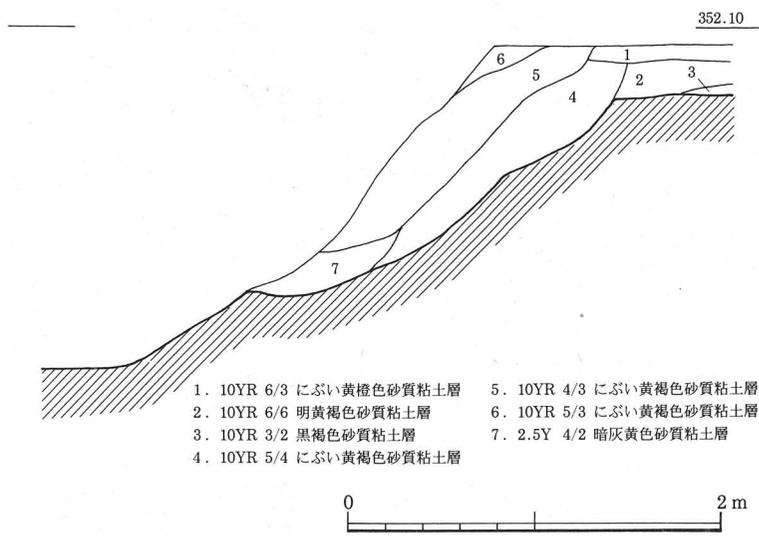
石垣の石材は、長さ約0.3m、幅約0.25m、高さ約0.2mから長さ約0.2m、幅約0.15m、高さ約0.1m程度の石を基本に、1段から2段に不規則に積み上げている。しかし、部分的には長さ約0.8m、幅約0.6m、高さ約0.5m程度の石材も存在する。石材は、周辺の地山内に存在するものと同系統のものであることから、周辺で集められたものであろう。

また、石垣は、この周辺の丘陵斜面を耕作地にするためいくつかの平坦地を作り、耕作地間の土砂の流失を防ぐために積まれたものと考えている。

時期は、出土遺物から江戸時代(18世紀前後)のものと考えられる。



第31図 田能北遺跡
石垣 2 平面・側面図



第32図 田能北遺跡 道状遺構断面図

道状遺構（第32図）

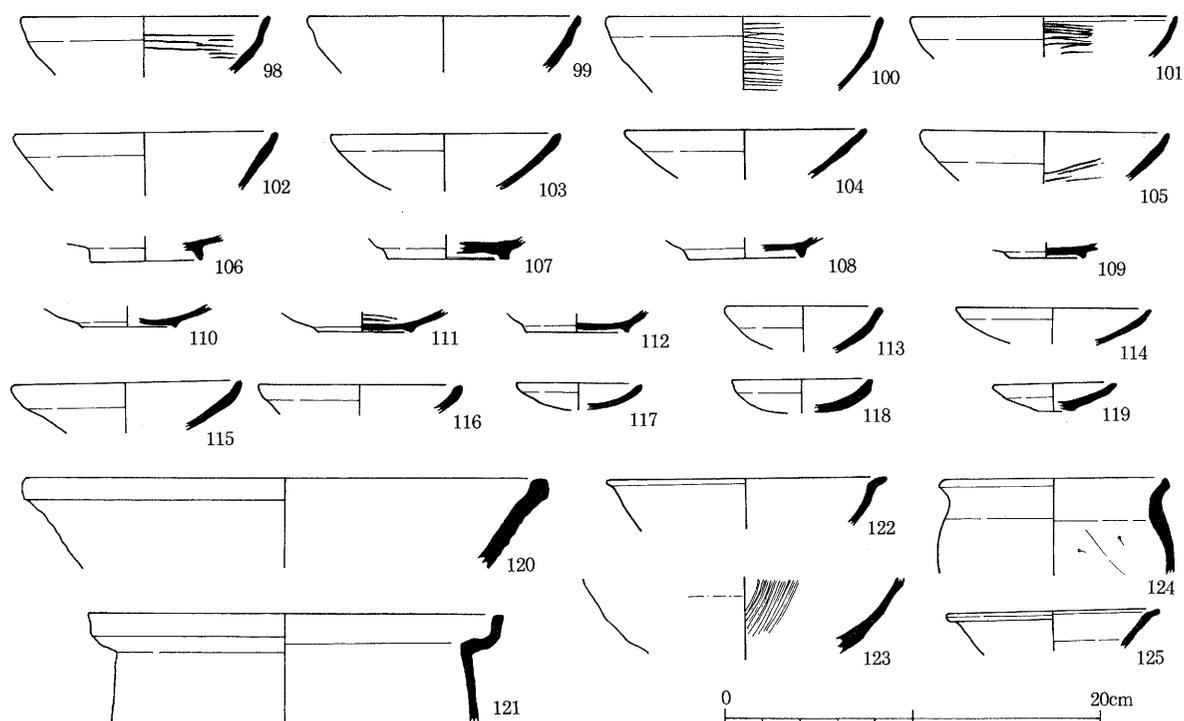
道状遺構は、石垣および耕作地と耕作地とを分ける段の下、 $X = -115.490$ 、 $Y = -36.913$ から $X = -115.520$ 、 $Y = -36.920$ 付近で検出した。道は、 $X = -115.495$ 、 $Y = -36.923$ 付近で上段の耕作地に沿って山側へ大きくカーブする。 $X = -115.520$ 、 $Y = -36.920$ より南側は、後世に削平を受け欠失し、一部を検出したのみであった。道状遺構の平面形および断面は、溝状を呈していたが、断面に水が流れていた痕跡が検出されなかったこと、現地表面に、若干離れて同方向に延びる里道が存在していたことから道と判断した。溝の計測値は、幅0.25mから0.6m、深さ0.05mから0.2m、検出長約50mを測る。平面形および断面は、溝状を呈していたが、断面に水が流れていた痕跡が検出されなかったこと、現地表面に、若干離れて同方向に延びる里道が存在していたことから道と判断した。

遺物は、出土しなかったが、土層断面観察の結果、時期は石垣2と同時代のものと判断され、江戸時代（18世紀前後）と推定される。

小結

中世と推定される遺構は、作業小屋と推定される建物1のみであること、調査区内から出土した遺物は少量であることなどから、集落の端部と推定される。検出状況から、中世の集落の本体は、東側の丘陵から棚田にかけて広がるものと推定される。

中世まではゆるやかな緩斜面であった調査地周辺は、江戸時代（18世紀前後）に水田化するために切り開かれたものと考えている。そのときにできた棚田の段差を補強するために石垣などを積んだものと推定される。



第33図 田能北遺跡 遺物包含層出土遺物

第6章 まとめ

高槻市大字田能地区（田能盆地）では、本格的な発掘調査は今回が初めてであるが、神宮時西遺跡では母屋と作業小屋（倉庫）と推定される2棟の建物、平安時代の用水路と推定される溝1本など、田能城跡では14世紀前半を中心とする遺構、建物1棟、屋敷跡2カ所およびそれに付随する土坑など、田能北遺跡では14世紀の建物1棟および江戸時代と推定される石垣2基などを検出し、多大な成果を挙げる事ができた。

これらの検出した遺構・遺物の中には、縄文時代と推定される石鏃（第26-97）が、田能城跡から出土しているが、これ以外に、平安時代以前に人々が生活していた痕跡は認められなかった。この地に人が入植し、小規模ながら集落が営まれ始めたと考えられるのは、平安時代になってからと推定される。1999年度に実施した遺跡確認調査の結果と総合して見ると、鎌倉時代になると集落の規模は急激に大きくなったものと推定され、広範囲にわたって集落が点在していたものと推定される。これらの集落は、遺跡の分布状況から丘陵の端部を囲むように存在していたものと推測される。

鎌倉時代初期に書かれた檜船神社伝わる棟札によると、皇室領荘園のひとつである七条院の荘園であった田能庄の住人たちは、田能庄鎮守檜船神社の社殿造営を行うとともに、五体の神像・仏像を造立した。これらは、現在も本神社と宮寺である神宮寺に納められている。中でも神宮寺所蔵の大日如来座像は、高槻市の有形文化財となっている。

これ以外にも、田能庄について記載されている数々の文献が認められ、中世荘園村落と農民の構造を知るための貴重な史料を提供しており、それについての論功も数多く存在する。

今回の調査では、棟札に記載されているような在地有力層（佐伯末貞＝主殿寮に所属する薪御作手と考えられている）の住居と推定される大規模な建物は検出していない。しかし、これらから鎌倉時代には大規模とは言えないまでも、ある程度の経済力をもった住人が存在したことを示し、そのことは田能盆地の3分の1が、中世を中心とする遺跡の範囲であることから言える。

今後も田能地区内の圃場整備事業（農地還元利活用事業「檜田地区」）に伴ない、ほぼ田能盆地全域において、遺構が破壊される地区を限定して発掘調査が行われる予定である。これらの調査の成果と、文献史料とのすり合わせにより、中世の田能（田能庄）の集落構造がより明らかになるものと考えている。今後の調査、研究に期待したい。

参考文献

- 河音能平「中世荘園村落と農民の生活」『高槻市史』 第1巻 本編1 高槻市史編さん委員会
高槻市役所 1977
富井康夫「高槻市」『大阪府の地名』 日本歴史地名体系 第28巻 平凡社 1986
大阪府教育委員会「田能地区遺跡確認調査概要」 2000

報 告 書 抄 録

ふりがな	たのういせきぐんはくつちょうさがいよう
書名	田能遺跡群発掘調査概要・II
副書名	農地還元利活用事業（榎田地区）に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奥 和之
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪府中央区大手前2丁目 06-6941-0351
発行年月日	2001.3.31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じんぐうじにししいせき 神宮寺西遺跡				35° 59' 54"	135° 59' 59"	1999年10月～ 同年11月	328	農地還元利 活用事業 (榎田地区)
たのうじょうあと 田能城跡	たかつきし おおあざ 高槻市大字 たのうちない 田能地内	27207	130	35° 59' 58"	135° 59' 58"	2000年2月～ 同年3月	494	
たのうきたいせき 田能北遺跡			178	35° 59' 58"	135° 59' 59"	2000年6月～ 同年8月	613	

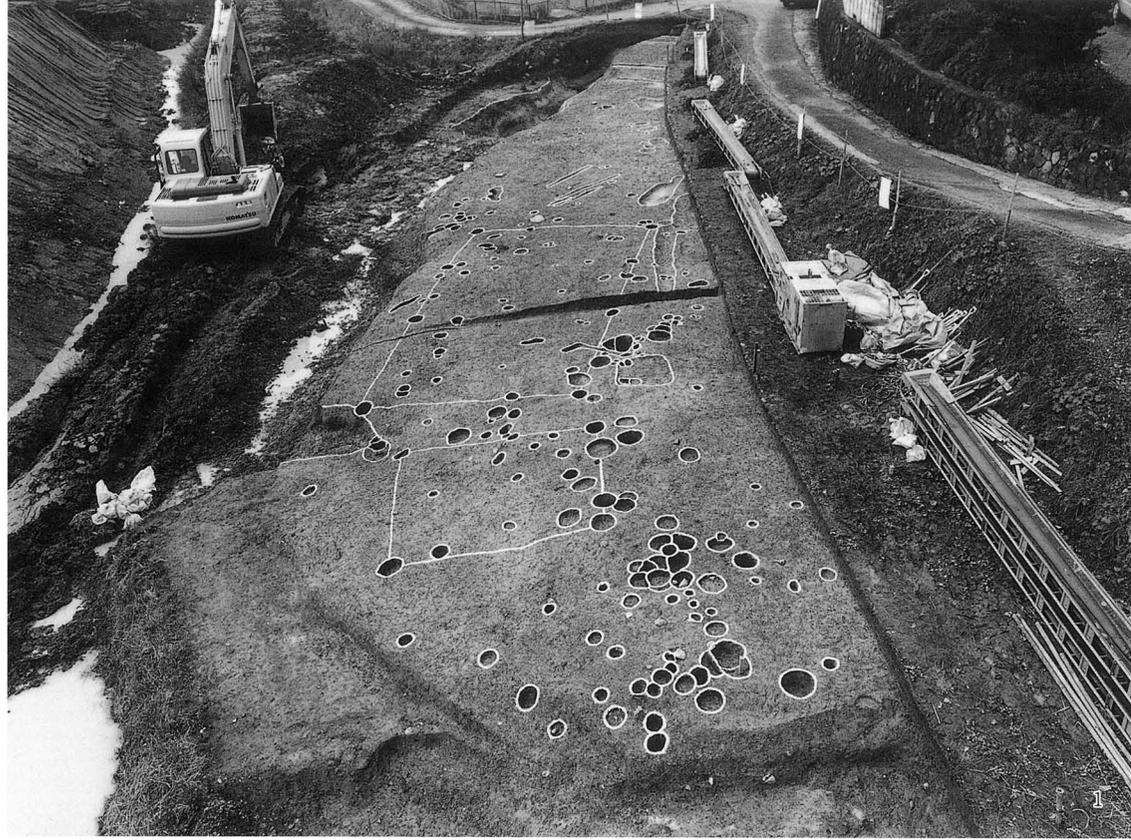
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神宮寺西遺跡	集落跡	平安時代 中 世	建物 2棟 柱穴 多数 土坑 1基 埋納ピット 1基 溝 1本	黒色土器 瓦器碗 土師器小皿 青磁碗 白磁碗	
田能城跡	集落跡	中 世 江戸時代	屋敷跡 2カ所 建物 1棟 石垣 1基 土坑 5基 炉跡 2基 柱穴 多数	瓦器碗 土師器小皿 青磁碗 白磁碗	
田能北遺跡	集落跡	中 世 江戸時代	建物 1棟 石垣 2基 道状遺構 1本 柱穴 多数	瓦器碗 土師器小皿 青磁碗 白磁碗 陶器	

図 版



調査地区全景（南西より）

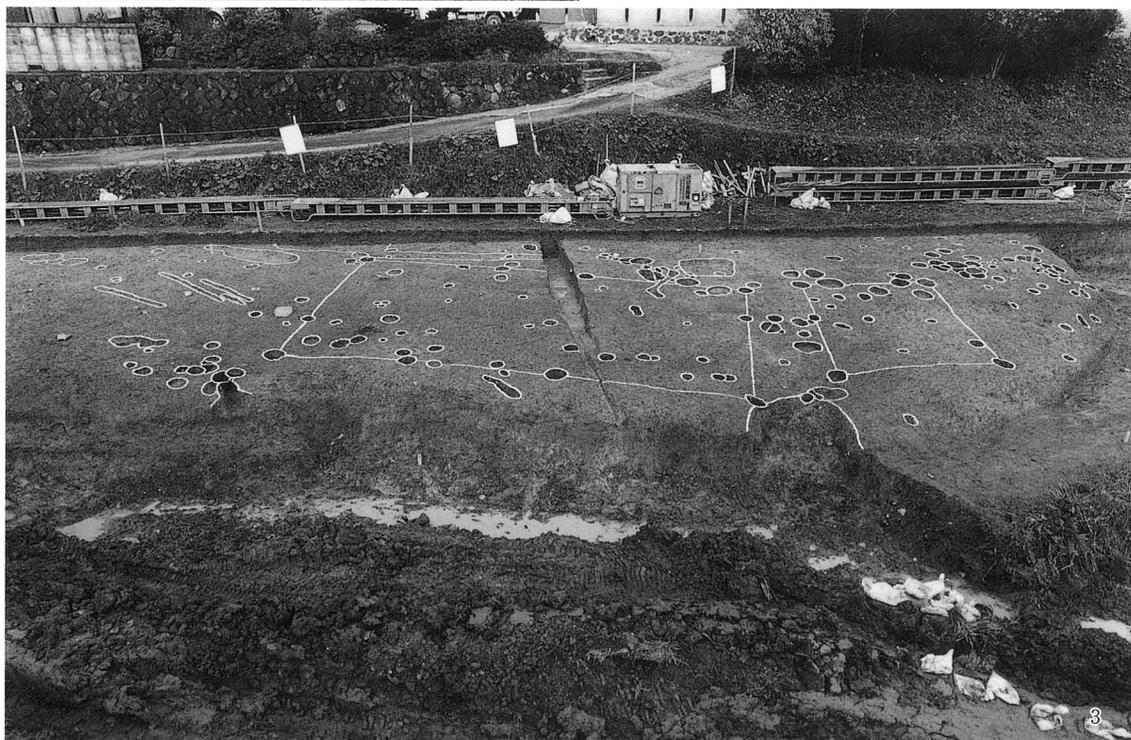
図版1
神宮寺西遺跡



1. 全景
東南より

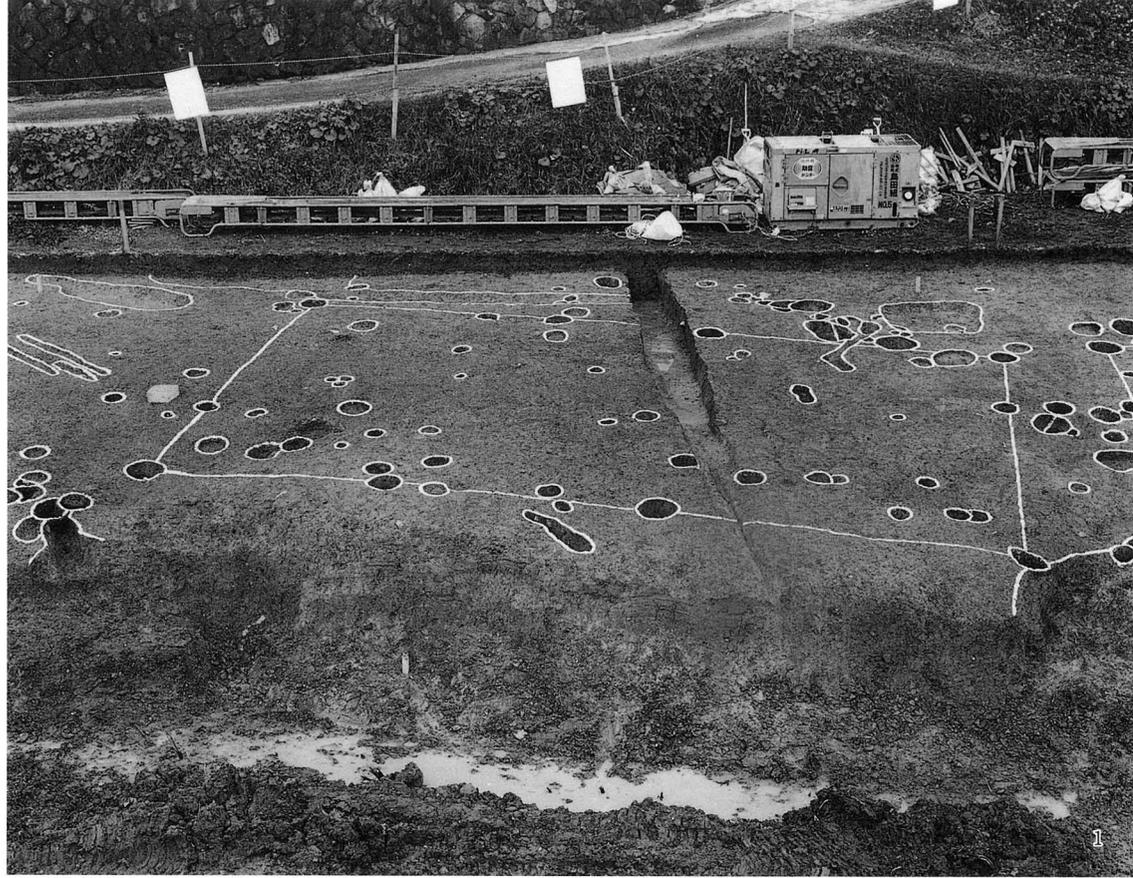


2. 基本層序
南より



3. 建物1・2
西より

図版 2
神宮寺西遺跡

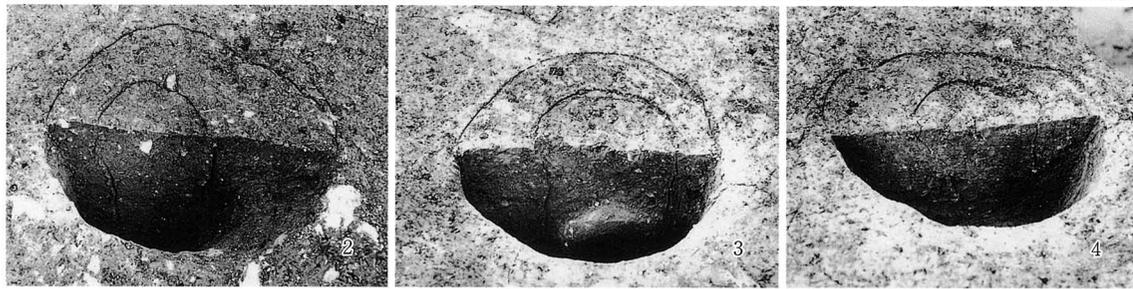


1. 建物 1
西より

2. 建物 1 SP 3 断面
西より

3. 建物 1 SP 8 断面
東より

4. 建物 1 SP 9 断面
東より

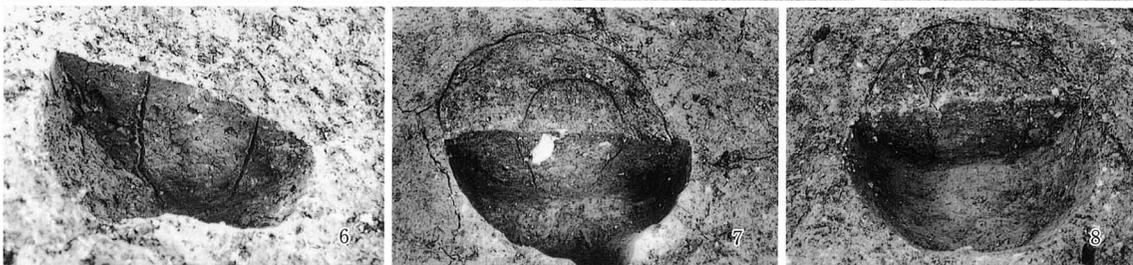
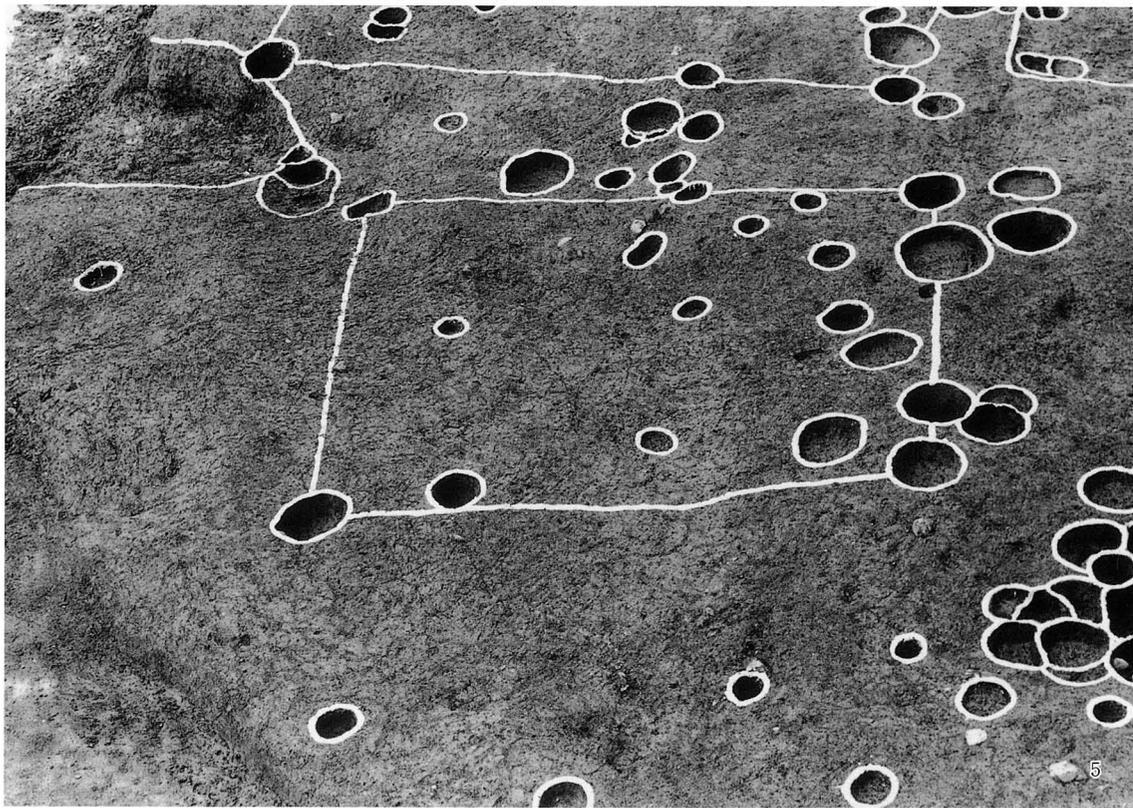


5. 建物 2
南より

6. 建物 2 SP 26 断面
西より

7. 建物 2 SP 27 断面
西より

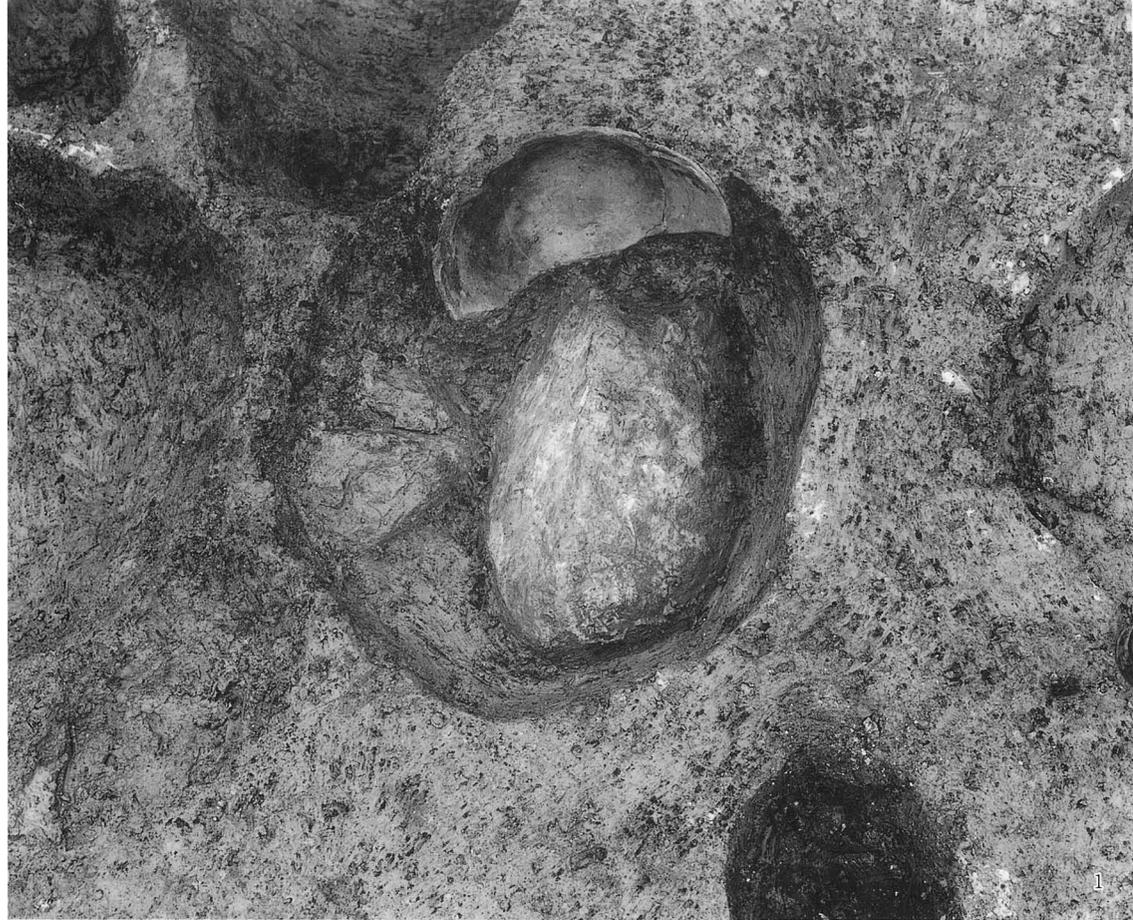
8. 建物 2 SP 28 断面
東より



図版3
神宮寺西遺跡

1. SP60遺物
出土状況

南より



2. 溝1

南より



3. 溝1断面

北より



図版4
田能城跡

1. 全景

南より



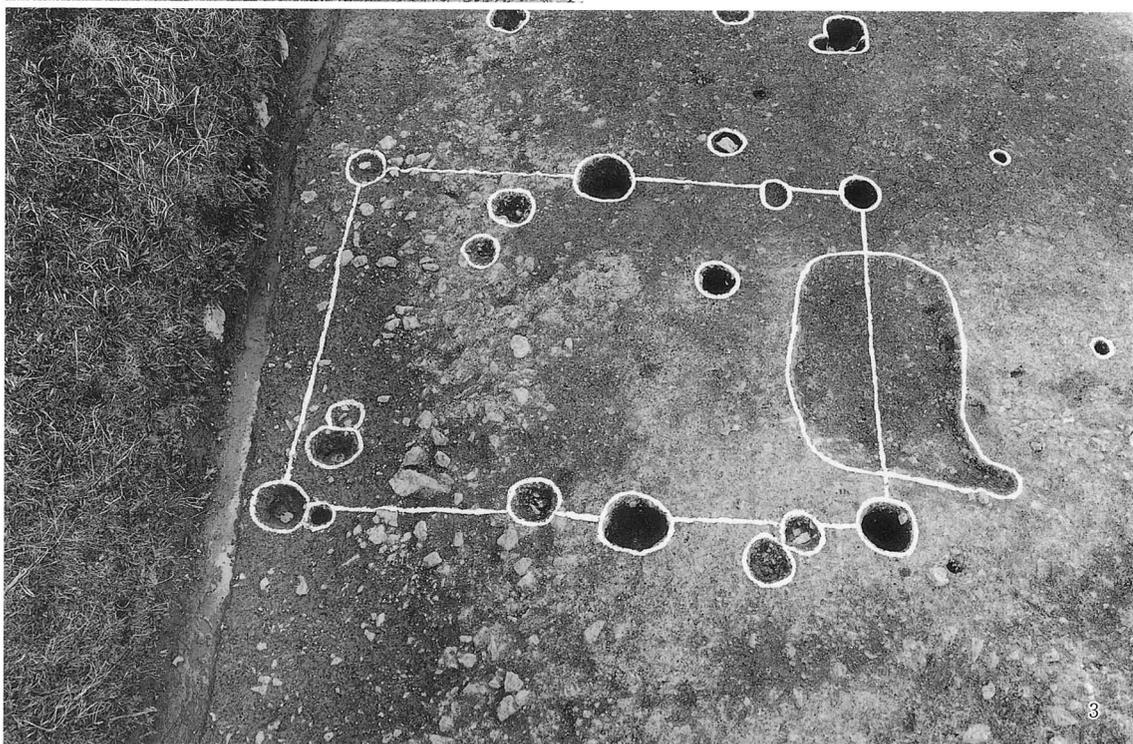
2. 基本断面

北より



3. 建物1

南より



4. 建物1 SP149断面

北より



5. 建物1 SP143断面

北より



6. 建物1 SP139断面

南より



1. 石垣

南より



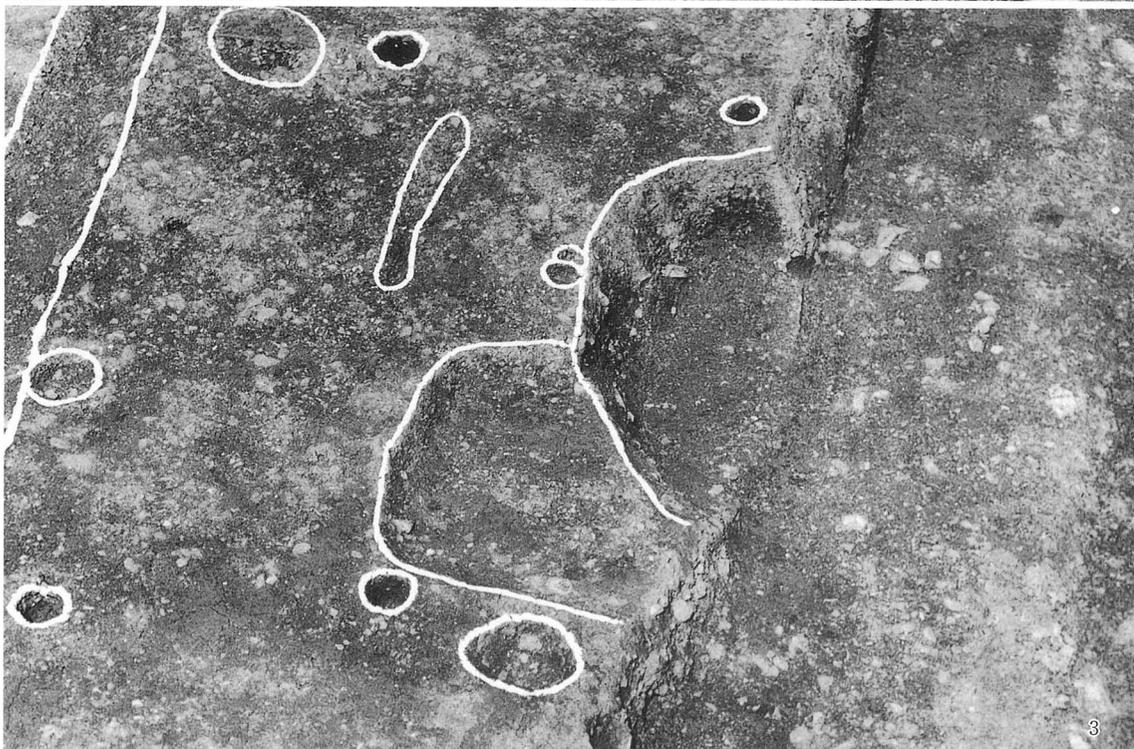
2. 石垣側面

東より



3. 土坑1・2

南より



1. 土坑1遺物
出土状況

東より



2. 土坑1遺物
出土状況細部

東より

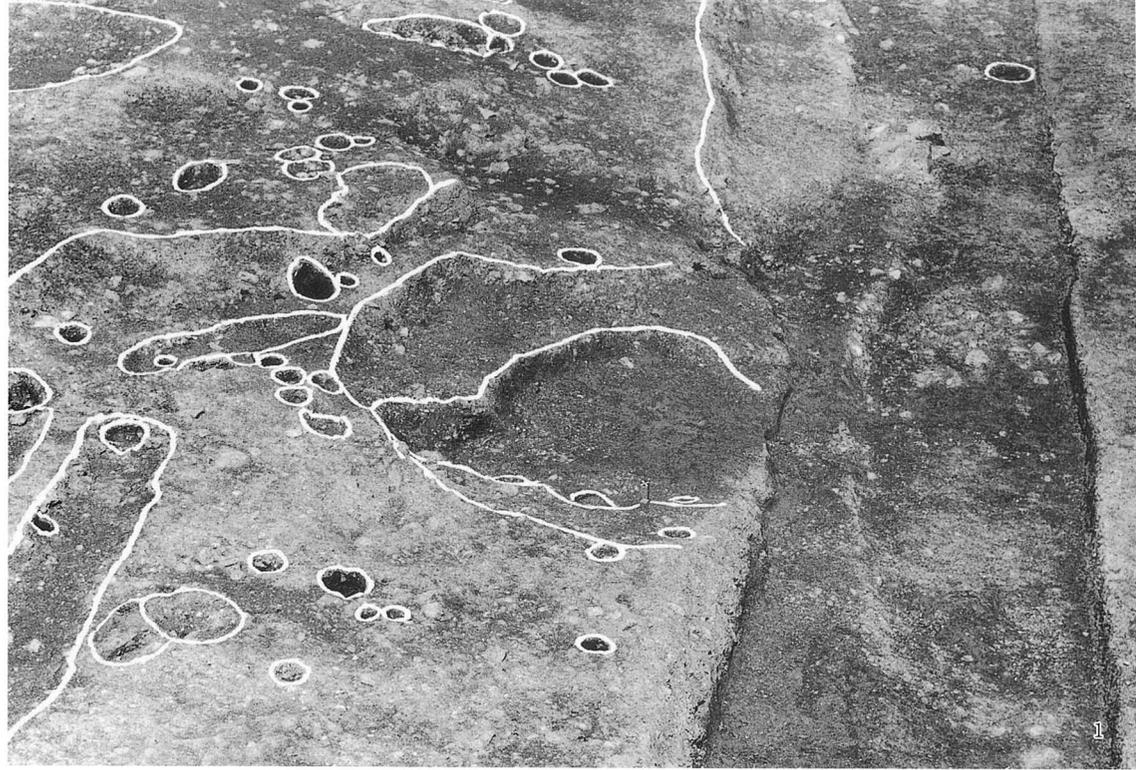


3. 土坑1・2断面

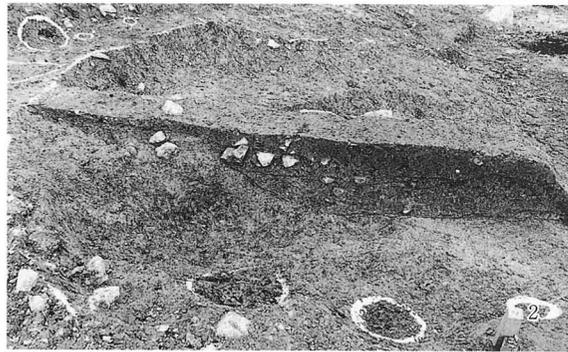
東より



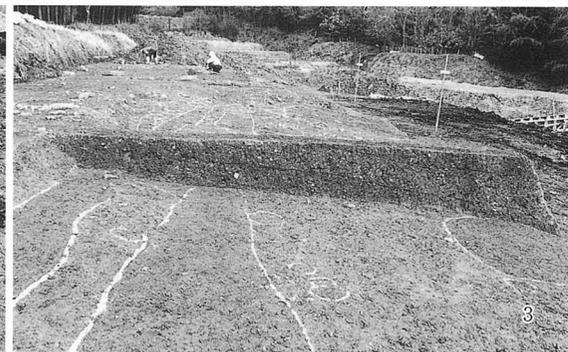
図版7
田能城跡



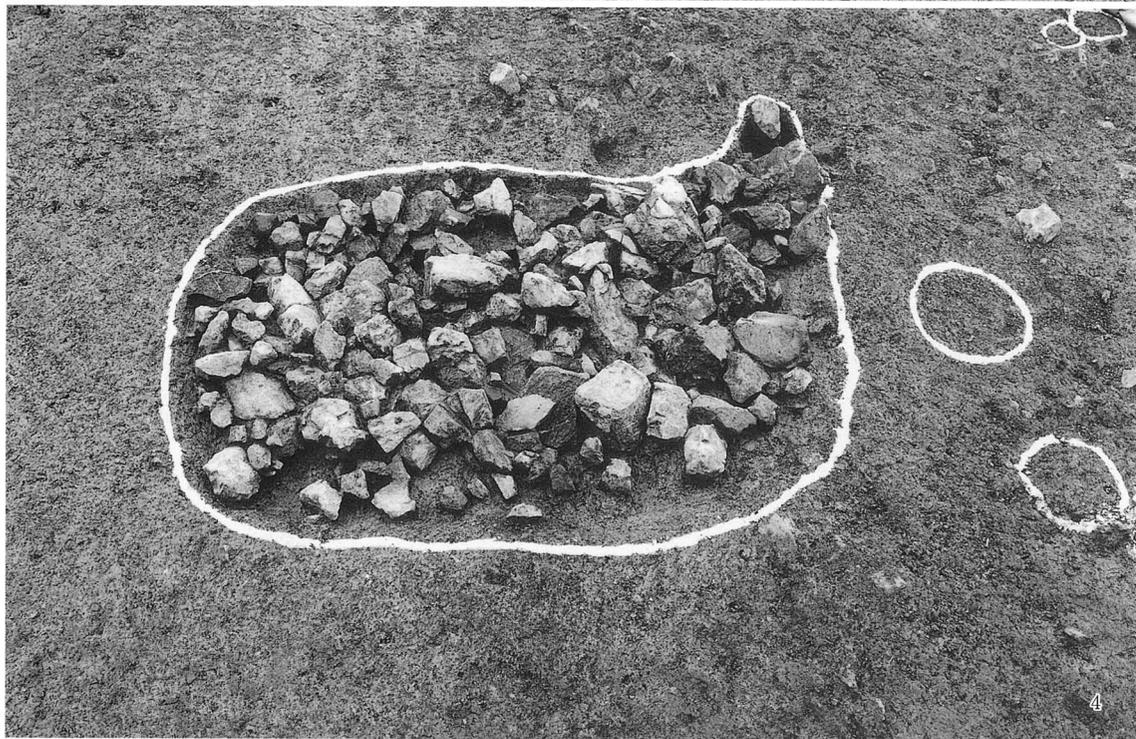
1. 土坑3
南より



2. 土坑3断面
南より



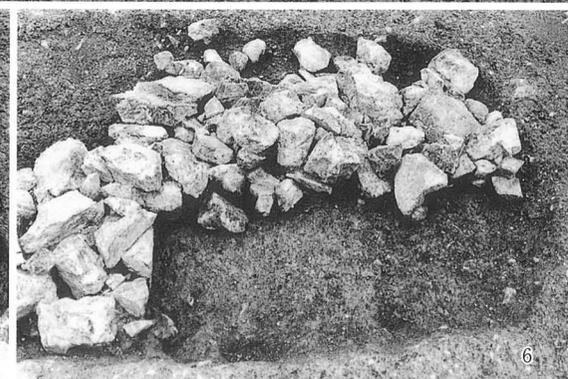
3. 屋敷地1断面
南より



4. 土坑5
西より



5. 土坑5土層断面
南より



6. 土坑5断面
東より



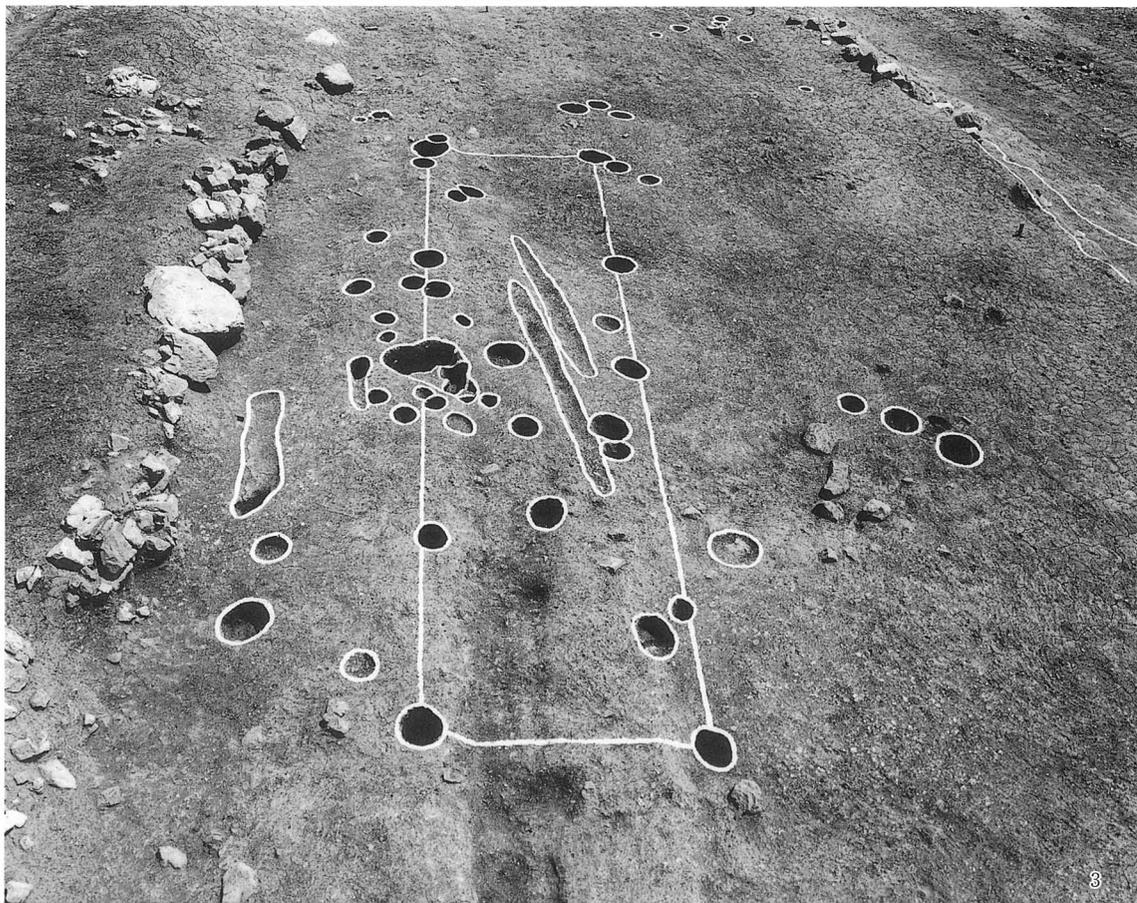
1. 全景

北より



2. 基本断面

南より



3. 建物 1

北より

1. 石垣1

西より



2. 石垣1 細部

西より



3. 石垣2

西より





1



10



39



40



41



42



43



44

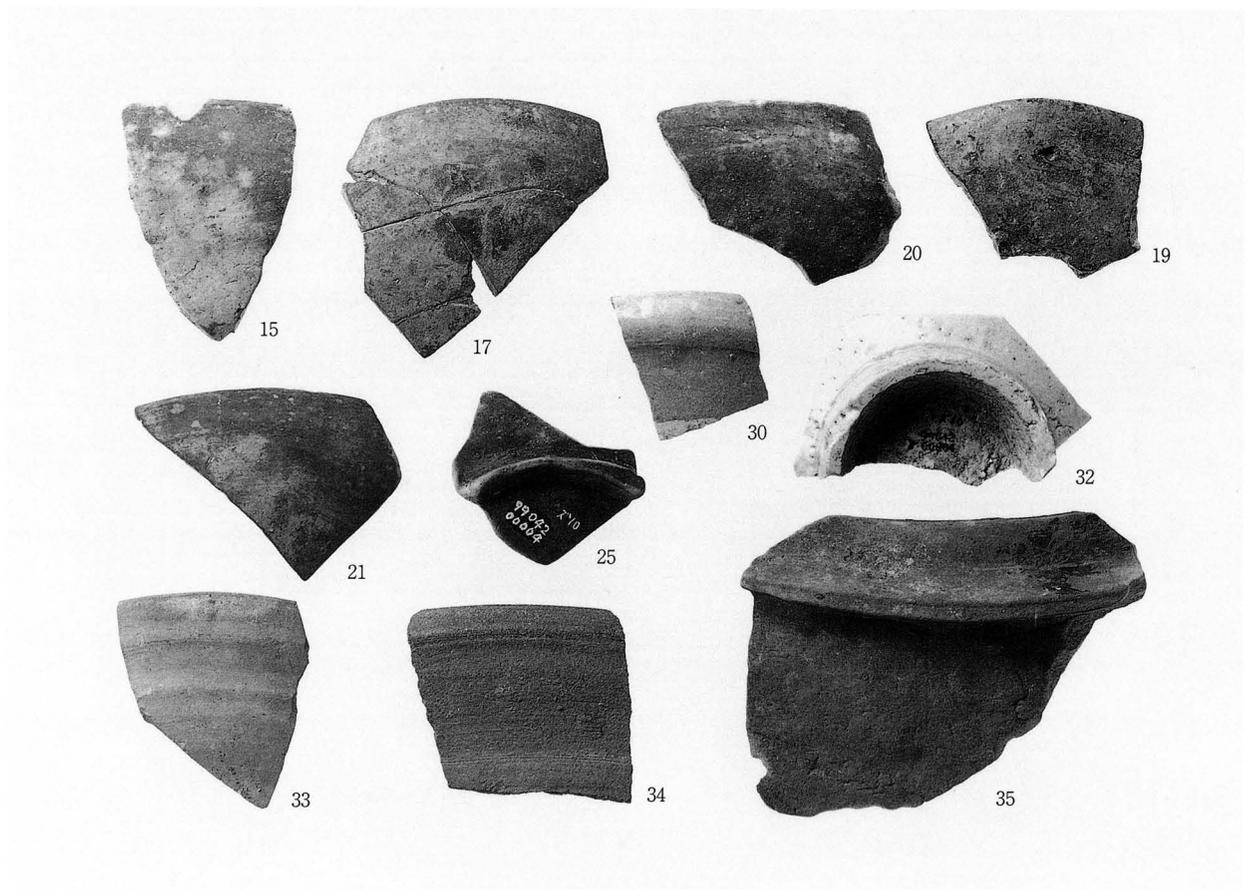
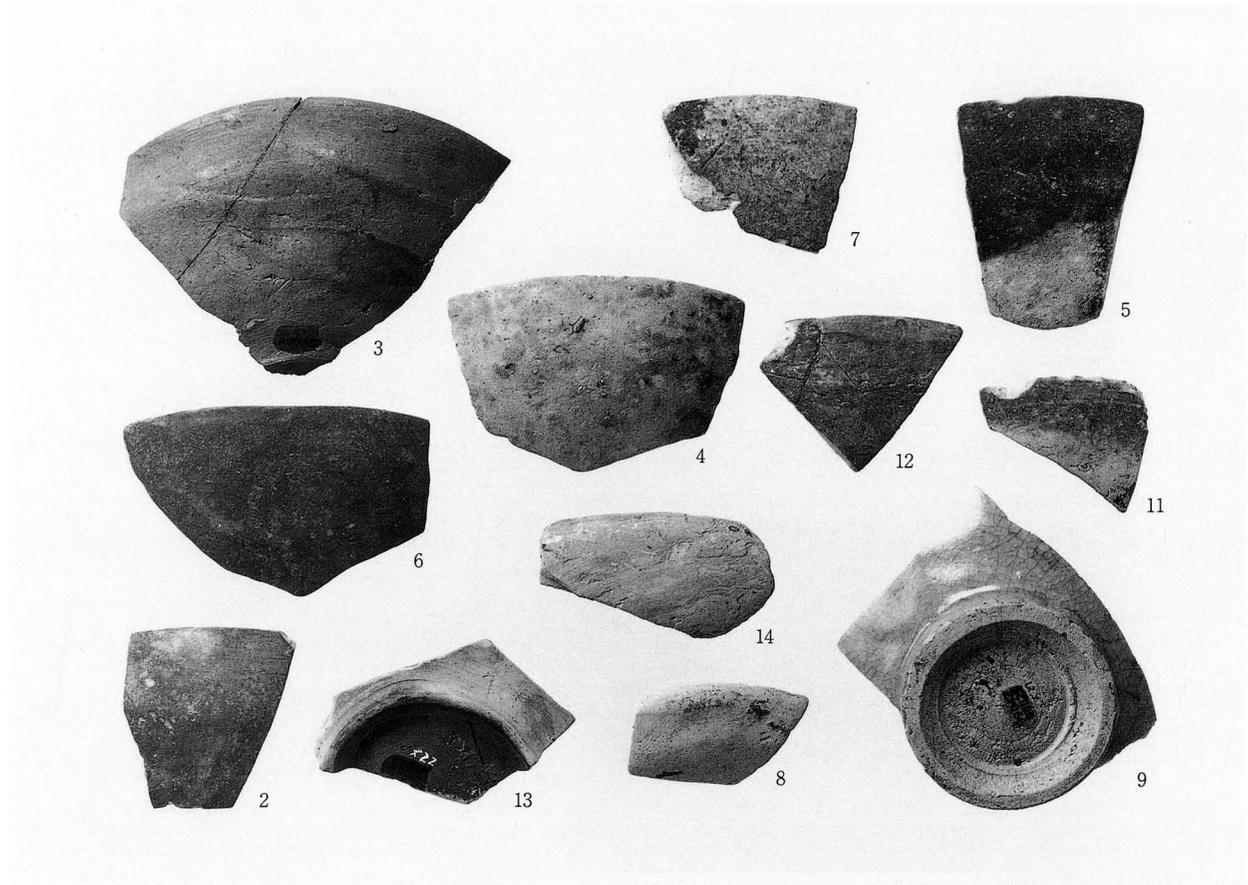


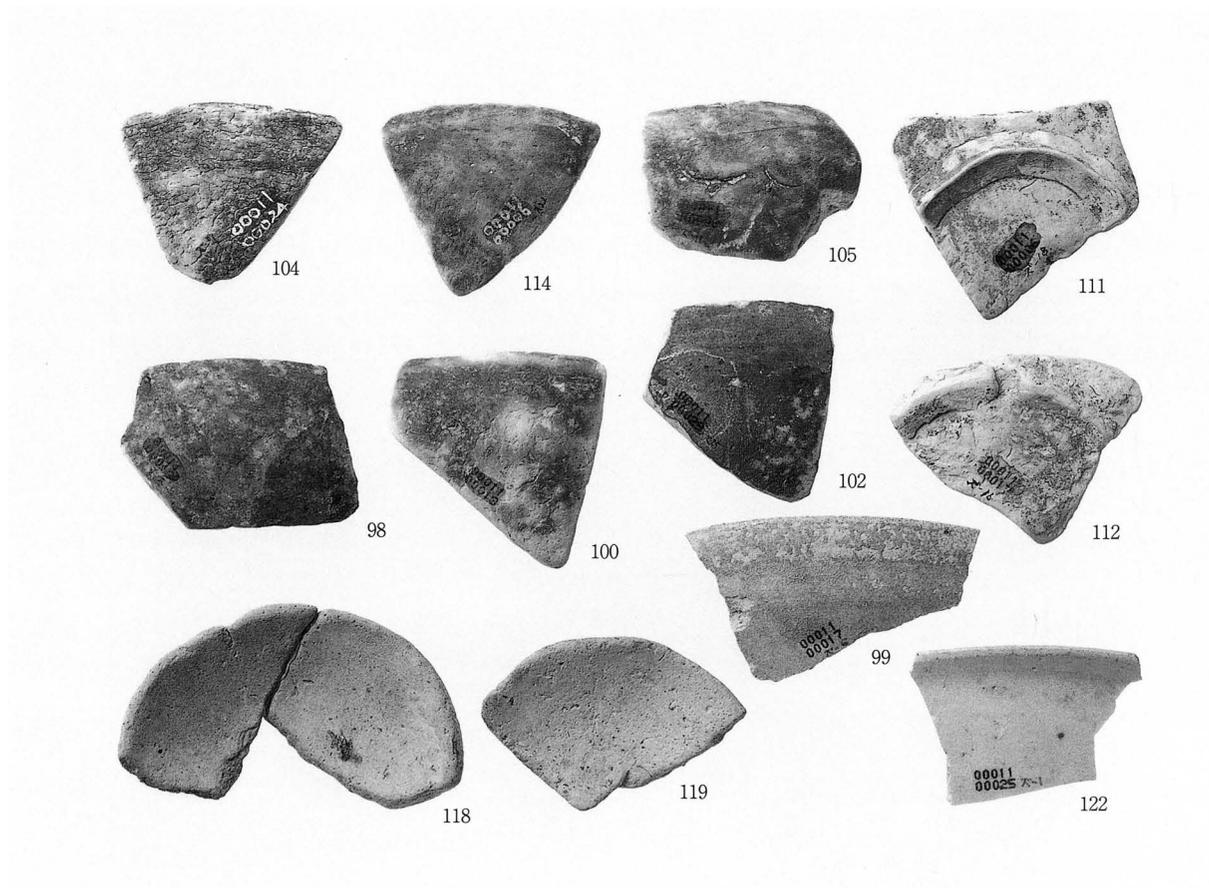
45



46







田能遺跡群発掘調査概要・II

— 農地還元利活用事業（櫻田地区）に伴う発掘調査 —

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351

発行日 2001年3月

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
TEL. 06-6976-8761

